

## <3歳クラス I期 4月> 全職員で安心感を支える

### これまでの保育の様子

3歳クラスの幼児は、家族と離れて遊んだり、集団で生活したりするのは初めての経験である。入園してすぐの頃、砂場で穴を掘ったり、花を摘んだりして、園での遊びに気持ちが向く幼児がいる一方で、家族と離れる不安から、泣きながら1日の遊びの時間を終える幼児もいた。

自分の好きな遊びを見付けたり、してみたいことに挑戦したりするには、その子にとって園が安心できる場所であってはならない。幼児一人一人の様子をよく読み取り、幼児が安心感をもって園生活を送ることを第一に考えていこうと、副担任と思いを共有していた。幼児のありのままを受け入れ、幼児との信頼関係を築くことで、幼児の気持ちが安定し、気持ちが遊びに向くのではないかと考えた。そのうえで、遊ぶ楽しさから、園生活に慣れていけるように、3歳保育室の目の前にある砂場には、プラスチック製のスコップなどを置いたり、小さめの砂山をつくっておいたりした。また、なべや皿などの料理道具を近くのテーブルに置き、すぐに遊び出せる状態にすることで、外遊びに興味をもてるような環境構成を行っていた。

4月10日

登園後、母親を追いかけ、入り口フェンスまで行く。

A児：「ママがいい。ママがいい」

教育補佐員：「そうだよね。ママがいいよね」

A児：「ママの所に行く。開けて」

教育補佐員：「ママの所行きたいよね」

A児：「開けて。開けて」

教育補佐員：「ママの車、見てくる？」

A児：「やだやだ。開けて」

教育補佐員：「そうだよね」

教育補佐員は担任にA児の様子を伝えに来る。

A児：「開けて、開けて」しばらく、その場で泣いている。

うみ組a児：「どうしたの？」

A児：「開けて」

うみ組副担任：「開けたいよね。どうやったら開くんだろう」

うみ組a児：「うーん」カギを動かしてみる。

A児は、じっとその様子を見ている。

うみ組a児：「何か、道具があったらいいのかな」ままごと道具の入っているかごを見に行く。

A児もうみ組a児についていく。かごの中に小さなスコップを見付け、それを持って砂場に行き、遊び始める。

入園して2日目のこの日、A児は母親と離れる不安から、母親を追いかけて入り口フェンスまで行った。担任は、他の幼児の受け入れをしていたため、A児に付き添えずにいたが、前日のA児の様子を副担任や教育補佐員など他の職員と共有していたため、教育補佐員がA児の後ろをついていく様子を見て、見守りを任せることにした。受け入れが終わった担任は、他の幼児と支度を済ませ、外に出た。教育補佐員は、A児の思いに共感し、駐車場を見てくることを提案したが、まだA児の気持ちが落ち着かないことを担任に伝えた。担任がA児の様子が見えるところまで行くと、うみ組a児とうみ組副担任がA児とやりとりしているところが見えたため、少し離れたところからA児の様子を見守った。しばらくすると、A児はうみ組a児と一緒に砂場で砂を掘り始めた。

入園式の次の日、幼稚園で遊ぶことに期待感をもち、楽しみに来ている幼児がいる一方で、家族と離れることに不安を抱き、泣いて過ごす幼児も数名いた。そこで担任は、この日の幼児の様子から、どの幼児も安心して過ごせるように、担任、副担任だけでなく、他の職員にも声をかけ、特に登園直後の時間帯は3歳クラス児の様子を見守ってほしいとお願いしていた。前日のうちに、担任の思いを他の職員と共有していたことで、担任が幼児の受け入れで手が離せない状況でも、他の職員がA児の様子に気付き、寄り添い、思いに共感してくれることにつながったと考える。また、初めにかかわった教育補佐員だけでなく、その後近くで様子を見守り、援助に入ったうみ組副担任も同様に、A児の思いを受け止め、一緒に考える言葉がけをした。A児とかかわった全ての職員が同じ方向性で援助していることが、A児の心の安定につながり、うみ組a児

と砂場に行くきっかけになったのではないかと考える。担任は、今後も副担任だけでなく、他の職員と情報共有しながら、A児の安心感を支えつつ、A児の好きな遊びは何かを読み取り、幼児理解を深めようと援助の方向性を確認した。

4月11日

登園後、A児は母親と離れるのが寂しく、泣きじゃくる。泣きながら、入り口フェンスまで行く。  
A児：「ママに電話して」  
うみ組副担任：「ママに電話してほしいの？」  
A児：「ママに電話して」  
うみ組副担任：「じゃあ、ママに電話してくれる先生の所に行こう」  
A児：「うん」うみ組副担任と手をつなぎ、そら組テラスまで来る。  
うみ組副担任：「あっ、電話してくれる先生いたよ」  
A児：「うん」  
うみ組副担任：「Aちゃん、ママに電話してほしいんですけど」  
担任：「あら、そうなの？」  
A児：「ママに電話して」  
担任：「うん。そっか。電話してほしいんだね」  
A児：「ママに電話して」  
担任：「Aちゃん、電話してママになんてお話するの？」  
A児：「ママ、きて」  
担任：「そっか。お迎えにきてほしいんだね」  
A児：「電話して」  
担任：「わかったよ。お部屋に電話あるから、電話してこよう」  
A児：「うん」保育室へ戻る。  
担任：「ママに来てってお話すればいいの？」  
A児：「うん」  
担任：「わかったよ。じゃあ、電話してみるね」保育室の電話機で、電話するふりをする。  
担任：「Aちゃんのママですか？Aちゃんがママに来てって話ししてほしいって言うてるんで、電話しました。はい。Aちゃん、遊んで待っていていいんですか？はい、分かりました。では、待っていますね」受話器を戻す。  
担任：「Aちゃん、ママがもうすぐ来るから遊んで待っていていいんだって。やったね」  
A児：「じゃあ、お山つくる」  
担任：「うん。お山つくろう！ママ、びっくりしちゃうね」  
A児：「うん！」自分で靴を履き替え、砂場へ向かう。

この日も登園後、A児は泣きながら入り口フェンスに向かった。入り口フェンス近くにいたうみ組副担任がA児に声をかけた。すると、A児は「ママに電話してほしい」と伝えたため、うみ組副担任は、担任とつなぐ援助をした。担任は、うみ組副担任と一緒に保育室へ戻ってきたA児が電話をしてほしいことを知り、一瞬迷った。緊急な内容ではないために、実際に母親に電話することはできない。しかし、A児の思いを受け入れることが、A児の安心につながるのではないかと考えた。そうすることが、担任との信頼関係を結ぶことにもつながるのではないかと考え、電話するふりをすることにした。うその電話でごまかすことへの後ろめたさもあったが、今はA児にとって母親とつながっている、いつでも母親が迎えに来てくれるという安心感が必要だと考えた。さらに、事務室へ行き、電話することも考えたが、今はA児の前で電話し、A児が実際に母親と話をしている内容（相手にはつながっていないが）を聞くことで、安心感につながるだろうと考え、保育室にある内線用の電話で電話をするふりをした。その時、A児の気持ちが遊びに向くように、遊んで待っていると母親が来てくれることを話した。

振り返りタイムでは、このやりとりを副担任と共有した。電話するふりをしたことで、A児は安心して遊び始めたのではないかと振り返った。電話しているふりをしたことで幼児にうそをついているようで、後ろめたい気持ちもあったが、今はA児が安心して園で過ごせることが第一と考え、今後もA児が電話してほしいと要求したときには、状況に応じて、それを受け入れていこうと方向性を確認した。また、保護者にもこの日の電話の様子やその後の遊びの様子を伝え、電話するふりをするので幼児が安心して遊んでいること

に理解を得た。

4月24日

A児：「先生、葉っぱ採りに行くよ」担任の手を引く。  
担任：「うん。行こう、行こう。今日もいっぱい採れるかな？」  
担任の手を引き、桜の木の下へ行く。  
A児：「あった。はい」担任のエプロンのポケットに採った葉っぱを入れる。  
担任：「ありがとう」  
繰り返し葉っぱを採り、担任のポケットに入れる。  
C児：「先生、こっち来て」  
担任：「はい。Aちゃん、ちょっと見てくるね。Cくん、どうしたの？」  
A児も担任に付いてくる。  
C児：「これ、なに？」畑のジャガイモの葉っぱを指さして聞く。  
担任：「なんだろうね」  
C児：「葉っぱだね」  
担任：「そうだね。」担任は幼児の目の前にカエルがいるのを見付け、立ち位置を変え、カエルに目線を送る。  
A児：「あっ！」カエルに気付く。  
D児：「何？」  
A児：「カエル！」  
D児：「えっ！どこどこ？」  
A児：「ここ！」指をさす。  
D児：「ホントだ！捕まえて！」手を出してみるが、触れない。  
A児：「そうだ！」うみ組テラスの方に向かって走っていく。  
D児：「どうしたのかな？いいこと、考えたのかな？」  
担任：「どうしたんだろうね」  
A児が手にシリコンカップを持って、走って戻ってくる。  
A児：「どこ行った？」  
D児：「ここ、ここ！」  
A児がカエルの上にシリコンカップをかぶせ、手で捕まえる。  
担任：「わあー！Aちゃん、すごーい！捕まえられたね」  
D児：「すごーい！」拍手する。  
担任：「やったね！」  
シリコンカップに入ったカエルを手に持ち、近くを通りかかったやま組担任に見せる。  
やま組担任：「これ、なあに？」  
A児：「これ、カエル」  
D児：「カエルだよ。Aちゃんがつかまえたの」  
やま組担任：「すごいね。やったね！」

この頃になると、A児は登園後すぐに遊びに向かうようになっていた。毎朝、桜の木の葉っぱを採ることから遊びがスタートした。朝の支度が終わると、担任の手を引き、桜の木の下へ行くと、葉っぱが採れそうな位置に自分でベンチを動かし、葉っぱを採り始めた。採った葉っぱは担任のエプロンのポケットに入れ、たまっていくことを喜んでいて。この日、葉っぱ採りが一段落したところで、担任が別の幼児に呼ばれ、その場を離れ、畑の方に向かうと、A児もD児と一緒に畑にやってきた。すると、担任はそこに一匹のカエルがいることに気付いた。ここで、担任がカエルの存在を伝えることもできたが、自分で見付けることが幼児の喜びにつながると考え、担任はカエルが幼児の目に入るように立ち位置を変え、カエルに目線を送った。すると、A児がカエルに気付いた。A児とD児でカエルを捕まえようとするが、手で触ることに抵抗があったのか、なかなか捕まえられない。しばらくして、A児が何かを思い付いたのか1人でうみ組テラスの方に向かっていった。担任は、この経験がA児にとって遊びのきっかけになるかもしれないと考え、A児がその場を離れている間、カエルを見失わないように目で追っていた。すぐに、A児はシリコンのカップを手に持って、走って戻ってきた。担任は、A児がカエルを捕まえるために柔らかく、自由に形を変えられるシリコンカップを持ってきたことに驚き、その様子を見守った。すると、A児はカエルの上にシリコンカップをか

ぶせ、シリコンカップの中にカエルを入れると、カエルを優しく包むようにして、手のひらにのせた。担任は、そのうれしそうなA児の表情を見て、「やったね！」とA児と一緒に喜んだ。その後、A児は、そのシリコンカップの中に入れたカエルを大切に手で包み、園庭を歩き、出会ったやま組担任、そら組副担任など、多くの職員や幼児に自慢げに見せて回った。

振り返りタイムでは、A児がカエルを捕まえた経験が大きな自信につながったのではないかと振り返った。A児はこの日の遊びの多くの時間、捕まえたカエルを手に持ちながら園庭を歩き回っていた。自分で考え、工夫して捕まえた経験が、このカエルを大切に作る姿につながったと考える。また、園庭で出会った職員や他の幼児に自分から声をかけ、カエルを自慢げに見せていた。A児が自分から他者にかかわろうとする姿が見られたことをうれしく思い、副担任と共有した。この日を境に、朝の支度が終わると、担任がいなくても自分でやりたいことを見付け、遊び始めるようになった。カエルを捕まえた経験が自信になり、安心して遊べるようになったのではないかと捉えた。

## 考察

I期は「教師とかかわりながら自分の安定できる場を見付けていく時期」である。幼児にとって幼稚園での生活は、初めての集団生活であり、初めて経験する環境である。教師と信頼関係を築き、安心して園生活が送れるようになることが第一だと考え、無理に幼稚園の流れにのせようとするのではなく、幼児の思いに寄り添っていこうと副担任と共有していた。しかし、一人一人の幼児の思いに寄り添うためには、担任・副担任だけでは難しい面もある。特に、入園直後のこの時期は、担任・副担任だけでなく、教育補助員、他クラスの職員、養護教諭、園長など全職員で、新入園児を見守り、支えることで幼児の安心感につながるのではないかと考え、協力をお願いしていた。A児にとっては、かかわる職員が全て同じ方向性で援助していたことが、早い段階で安心感をもち、気持ちが安定することにつながったのではないかと考える。

また、遊びの中で喜びを見付け、自分の力でカエルを捕まえたことが、A児にとって大きな自信になったと考える。気持ちが安定すると、遊びを楽しむことができるようになる。遊びを楽しむことがさらに気持ちの安定につながる。気持ちの安定と遊びの楽しみがよい循環になっているのではないかと捉えた。今後も、幼児一人一人の思いを読み取り、遊びを通して、安心して過ごせるように援助していきたい。

## <3歳クラス II期 6月> 子どもの言葉にならない思いを読み取ることを大切に、遊びを支える

### これまでの保育の様子

入園から3か月が経ち、幼児一人一人が自分のやりたいことを見付け、遊ぶ姿が見られるようになってきた。同じクラスの幼児と「○○しよう」と誘い合って遊んだり、「貸して」「いいよ」などと言って、道具のやりとりをしながら、一緒に遊んだりしていた。園庭や園舎裏での生き物探しでは、年上の幼児と一緒に生き物を探したり、捕まえた生き物を見せてもらったりする姿が見られた。「捕まえた虫を入れ物に入れたい」、「集めた木の実を入れ物に入れたい」という思いをもつ幼児も出てきたため、幼児の思いを聞きながら、プラスチック容器やビニール袋を提供できるように準備し、環境構成を更新してきた。

6月になると暑い日が続き、水を使った遊びを楽しむ幼児が増えてきた。水盤の近くに雨どいやバケツを置き、自分たちで扱えるように環境を更新した。E児は、出会いの広場の前の水盤に、雨どいを置いて水やおもちゃを流したり、バケツに水を溜めたりして遊んでいた。

6月12日

自分のかぶっていた帽子をバケツの中に入れ、濡れた帽子をアスファルトの地面にたたきつけるように投げる。その帽子を拾って、またバケツの中に入れることを繰り返す。

担任：「おもしろいね」

E児：「うん」

濡れた帽子を振り回す。

E児：「びちょびちょ！」

担任：「本当だ。びちょびちょ！」

濡れた帽子を土の地面に投げつける。

E児：「砂！」

担任：「本当だ。砂がついたね」

汚れた帽子をバケツに入れ、くるくる混ぜる仕草をする。

E児：「きれいになった！」

帽子を担任に見せる。

担任：「本当だ。すごいね。お水に入れるときれいになるんだね」

帽子に砂を付けては、バケツで洗うことを繰り返す。

E児はこの日、朝から水盤で水を使った遊びを楽しんでいた。担任は、園庭に出て他の幼児が遊び始めたのを確認し、水盤の近くに戻ってくると、E児は自分の帽子を水の入ったバケツの中に入れて遊んでいた。バケツから濡れた帽子を取り出し、嬉しそうに見つめたE児は、その帽子をアスファルトの地面にたたきつけるように投げた。E児は、ケラケラと笑い声をあげながら、投げたは拾ってバケツに入れ、また投げたは拾ってを繰り返していた。担任は、E児が帽子を投げているのを見て、一瞬止めようかとも迷ったが、E児は水を含んだ帽子の重さやそれを投げた時のバシャっという音、その感触を楽しんでいるのではないかと読み取り、「おもしろいね」と言いながら、一緒にその様子を楽しむことにした。E児がこんなにケラケラと笑い声をあげているのが初めてだったため、担任はうれしくなり、わくわくしながらE児の楽しみを見守った。しばらくすると、E児はその帽子を土の方へ向けて投げ、砂で汚れた帽子を担任に見せた。担任が「砂がついたね」と言葉をかけると、E児はその汚れた帽子をバケツに入れ、バケツの中の水をくるくると手でかき混ぜる仕草をした。このとき、担任は昨年度の交流で「洗濯」を遊びとして捉え直した事例を思い出し、もしかしたらE児は洗うことを楽しんでいるのではないかと捉えた。

この日の帰りに、E児が砂で汚れた帽子を洗っていたことを母親に伝えると、家でも一緒に靴を洗った経験があることを教えてもらった。担任は家で経験が幼稚園での遊びにつながっているのだと捉え、E児が家で経験してきたことを園でも試せるように環境を整えていこうと考えた。そして、この日の振り返りタイムでは、E児が「洗濯」をイメージして遊んでいるのではないかとすることを副担任と共有した。また、担任がE児がかぶっていた帽子をバケツに入れて遊んでいる姿を見て、その行動を止めるのではなく、その行動からE児のやりたいことや楽しみを読み取り、見守ったことで、E児の輝くような笑顔につながったと振り返った。そこで、次の日もE児がこの遊びを楽しめるように、汚れの分かりやすい白い布巾を水盤の近くに置いておくこと、いつもは足を洗うために使っているたらいを手の届くところに置いておくことを確認した。そして、この日の片付けの時間にE児が濡れた帽子の扱いに困っていたことを共有

し、E児の思いに合わせて、保育室にかけてある物干しを出せるように準備しておくことを副担任と共有し、環境構成を考えた。

6月13日

E児：「お洗濯！」近くに置いてあったたらいに気付き、水盤の近くまで持って行く。

担任：「いいの見付けたね」

E児：「うん」

たらいに水を溜め、かぶっていた帽子や近くにあった布巾を入れ、しばらく洗濯遊びを続ける。

E児：「これ、どうしよう」濡れた帽子を見せる。

担任：「びちょびちょだね」

E児：「びちょびちょで、お部屋に持って行けない」

担任：「どうしたらいいかね」立ち位置を変える。

E児：「あっ」物干しまで走って行き、帽子を洗濯ばさみではさむ。

E児：「これも」布巾を持って来て干す。

この日、E児は登園後すぐに水盤に向かうと、通り道でたらいを見付け、水盤の水が届く位置まで運んで行った。その様子を近くで見ていた担任は、E児はこれまでの家庭での経験から、たらいに目が向き、遊びに使いたいという思いをもったのではないかと読み取った。E児は、水盤の近くに置いておいた布巾にもすぐに気付き、布巾を水でぬらしたり、土の汚れをつけては、洗ったりして遊んでいた。担任は、E児がたらいや布巾を使い、多様に試す姿から、E児がこの洗濯遊びに夢中になっていることを読み取り、この楽しみが続くことを願った。そして、前日の片付けの際に濡れた帽子の扱いに困っていたE児の様子を思い出し、この日も同じように困るのではないかと考え、これまで濡れた帽子や布巾を干すために、保育室にかけてあった物干しをE児の手の届く所にかけておくことで、洗った後に自分で干すこともE児の楽しみにつながればと願い、E児に気付かれないように、そっと手の届くところに物干しをかけておくことにした。しばらく遊んだ後、E児は濡れた帽子を持って、担任の所へ来ると、「これ、どうしよう」と濡れた帽子の扱いに困っていることを伝えた。担任は、E児の思いに共感し、「どうしたらいいかね」と一緒に考えながら、E児に物干しが見えるように立ち位置を変えることにした。E児は、「あっ」と物干しに気付き、物干しの方に駆け寄って行くと、帽子を洗濯ばさみではさみ、とても満足そうな表情を浮かべた。

この日の振り返りタイムでは、E児にとってこの洗濯遊びが今の楽しみになっていることを副担任と共有した。たらいに水を溜め、帽子や布巾を洗う遊びを楽しんだ後、物干しが自分の手の届くところにあったことが、E児の楽しみの広がりにつながったのではないかと振り返った。教師から物干しを提示するのではなく、さりげなくE児の視線に入るような所にかけておいたことで、E児が自分で見付け、自分で洗濯した物を干すことにつながり、それがE児にとって自信になっているのではないかと考えた。さらにE児の楽しみが続くように、次の日の朝、乾いた布巾を物干しに干したままにしておくこと、たらい、物干し、布巾などはしばらく水盤の近くで使えるようにすることを副担任と確認した。

次の日の朝、E児は「先生、乾いてる！」と乾いた布巾を手を持って、受け入れの保育室テラスまでやって来た。E児にとって、帰るときにはまだ濡れていた布巾が、次の日には乾いているという大発見につながり、心が動いた瞬間だったのではないかと捉えた。この後もE児がこの遊びに夢中になれるように、たらいや物干しをいつでも使えるようにしておこうと、環境を整えた。

6月20日

E児：「あれ？ない」

担任：「何がほしいの？」

E児：「お洗濯するやつ」

担任：「お洗濯するやつって？」

E児：「お水いれるやつ」

担任：「たらいのこと？」

E児：「そうそう！」

担任：「どこにあるんだろうね」

E児：「うみさん（5歳クラス）のところ」

担任：「そうだったね。行ってみる？」

E児：「うん」 5歳クラスのテラスに向かう。

E児：「あった！」

担任：「これ、使いたいの？」

E児：「うん！」

担任：「持って行っていいのかな？」

E児は周りを見渡し、5歳クラス幼児を見付け、じっと見つめる。

担任：「お話してみる？」

E児：「うん」

担任：「Eちゃんが、お話があるみたい」

5歳クラスa児：「何？」

E児：「貸して」

5歳クラスa児：「これ、使いたいの？」

E児：「うん」

5歳クラスa児：「いいよ。終わったらまたここに戻してね」

E児はうなずく。

担任：「Eちゃん、よかったね。aちゃん、ありがとう」

E児はうなずき、たらいを持って、3歳クラスの方へ運ぶ。水盤近くにたらいを置き、蛇口をひねって水を出す。水がたらいに入るように、たらいの位置を動かす。近くにいたF児が蛇口をさらにひねると、E児の頭に水がかかる。

E児：「びちょびちょになっちゃった」

担任：「大丈夫？」

E児は濡れた帽子をとり、たらいに入れる。

E児：「お洗濯！」

F児もかぶっていた帽子をとり、たらいに入れる。

F児：「お洗濯！」

E児とF児は、たらいの中の水の流れをみつめる。

F児：「汚れがついてたから、これ、お洗濯しないと」

E児は、たらいの中で浮かんでいる帽子を水の中に押す。

しばらくして、G児が園舎裏のバーベキューごっこに担任を誘いに来る。

G児：「先生、バーベキューやってるから来て！」

担任：「わあ、楽しそう。どこどこ？」G児と一緒に園舎裏に行く。E児らも一緒に付いてくる。

E児は、他の幼児と一緒に園舎裏でバーベキュー遊びを楽しむ。

E児：「お洋服、汚れちゃった」

担任：「本当だね。どうする？」

E児：「お洗濯！お洗濯すれば、きれいになる」

担任：「いい考えだね」

E児は、走って水盤に向かう。

E児：「お洗濯！お洗濯！」

蛇口をひねり、たらいに水を溜めて、着ていた服を脱ぎ、たらいの水の中に入れる。

担任：「きれいになるかな？」

E児は、服をたらいの中でぐるぐるとかき回す。

E児：「きれいになった！」服をたらいから持ち上げる。

F児：「わたしも！」着ている洋服を脱ぎ、たらいに入れてかき混ぜる。

この日、E児は登園すると洗濯をするためのたらいを探していた。いつも使っていたたらいは、他の幼児が遊びに使っていたために使える状態ではなかった。E児は以前、5歳クラスから借りたことを思い出し、担任と一緒に5歳クラスに貸してもらいに行った。E児はたらいを見付けたが、なかなか自分から5歳クラス児に声をかけられずにいた。その様子を近くで見ていた担任は、E児の洗濯に対する強い思いを読み取っていたので、自分から「貸して」と言えるような環境を整えることにした。これまでなかなか自分の思いを伝えようとする事のなかったE児が自分で「貸して」と5歳クラス児にお願いする様子から、E児の洗濯遊びに対する思いの強さを改めて感じた。担任は、遊びに夢中になることが、E児のかかわりにもつながったのではないかと、嬉しく思った。E児はたらいを貸してもらおうと、自分で3歳クラス近くの水盤まで運び、

たらいに水を入れ、しばらく布巾や帽子を洗う洗濯遊びを楽しんでいた。担任はE児が、蛇口から出る水をたらいの中に溜めようと、たらいの位置を調整したり、たらいに溜まった水が渦を巻くように流れていくことを発見し、その水流にのせ、布巾を流したりしている様子を近くで見守っていた。

しばらくして、G児が園舎裏のバーベキューごっこと一緒にいこうと担任を誘いに来たタイミングで、G児と一緒にバーベキューごっこを見に行くことにした。その様子を見ていたE児も他の幼児と一緒に園舎裏のバーベキューごっこに仲間入りした。しばらくバーベキューごっこを楽しんでいると、E児が洋服の汚れに気付き、担任にそれを伝えに来た。担任が、「どうする?」と言葉をかけると、E児は「お洗濯!」と勢よく答えた。担任は、そのときのE児の表情から「自分の服も自分で洗いたい」と洗濯に対する思いが高まっているのではないかと読み取り、一緒に走って水盤まで行った。水盤に着くと、E児はたらいに水を溜め、自分の着ていたTシャツを脱ごうとした。担任は、屋外でTシャツを脱ごうとするE児の様子を見て、「ここで脱いでも大丈夫か」「脱いだ後、E児の洗濯をどう支えようか」と瞬時に考え、E児の思いが高まっている今、存分に洗濯遊びを楽しんでほしいと願い、保育室から代わりのE児のTシャツを持ってくることにした。E児のTシャツを持って戻ってくると、E児はたらいに自分の服を入れ、洗濯をしていた。いつもなら自分で服を着るように促すところだが、このときはE児が洗濯に夢中になっている様子を読み取れたため、担任がTシャツを着せることにした。E児は、Tシャツの入ったたらいの水をぐるぐるとかき混ぜるような仕草をした。それを見ていた他の幼児も自分の着ていたTシャツを脱ぎ、たらいに入れると、ぐるぐるとかき混ぜる様子が見られた。

この日の振り返りタイムで、担任がE児の楽しみを把握し、アンテナを張っていたからこそ、E児の洗濯遊びが広がっていったのではないかと振り返った。教師が、幼児一人一人のそのときの楽しみを把握し、アンテナを張っておくことで、ちょっとしたきっかけを見逃さず、幼児の遊びを支えることにつながるのではないかと捉えた。これまで着替えの際には、教師に手伝いを求めていたE児だったが、このときには自分だけで汚れたTシャツを脱いでいた。その様子からも、この洗濯遊びがいかにE児の楽しみになっていたのかが分かる。そんな瞬間を見ることができ、とても幸せな気持ちになった。

## 考察

E児の洗濯遊びは、2週間以上続く遊びになった。E児がこんなにもこの遊びに夢中になったのはなぜかと振り返ると、教師が子どもの表情や行動からその背景にある子どもの思いをどう読み取るかがとても大切だったのではないかと考えた。E児が自分の帽子をバケツに入れたり、投げたりしているとき、もし教師が制止していたとしたら、E児のこの姿は見られなかったかもしれない。教師が子どもの目線に立ち、子どもと同じ思いで子どもの遊びを捉えることが子どもの楽しみを支えることにつながるのではないかと考えた。特に3歳クラス児は、自分の思いを言葉で表現するのは難しい面もある。だからこそ、教師が幼児の表情やしぐさ、視線などちょっとした変化を見逃さないように、アンテナを張っておくことが大切である。さらに、担任だけでなく、他の職員や保護者等と連携を図り、幼児理解を深めることも大切なのではないかと考える。

また、子どもの思いを読み取った上で、その遊びの展開を想定し、環境を整えておくことも大切になってくる。今、目の前の子どもの楽しみは何なのか、何に興味をもっているのかをよく読み取りながら、次に子どもがやってみたいと思うことを想定し、場をつくったり、道具を準備したりするようにしてきた。そのことで、E児の「やってみたい」を支えることができたのではないかと考える。

また、このE児の洗濯遊びを肯定的に捉え、援助することができたのは、昨年度の他園との交流で他の職員がまとめた「交流だより」が頭に浮かんだからである。昨年度、他園との研修の中で、これまで遊びと捉えていなかった「洗濯」を遊びと捉えるようになったこと、どの子も好きなことに夢中になっているかという視点で子どもをみることの大切さが、「交流だより」を通して、園内で共有されていたことを思い出した。これからも、子どもの思いをよく読み取り、そのときの思いに寄り添った援助ができるように心がけていきたい。



### <3歳クラス Ⅲ期 10月> 遊びを充実させることでかかわりを支える

#### これまでの保育の様子

夏休みを終えてまだ暑さが残る中、テントを設置したり、タープを張ったりして日陰をつくり、外遊びを楽しめるように環境を整えてきた。3歳クラス児は、水を使った遊びやバーベキューごっこなど思い思いの遊びを楽しむ様子が見られた。10月になると少し暑さも落ち着き、気持ちよい秋晴れの中、外遊びを楽しむ幼児が多かった。生き物探しをして園庭を走り回る幼児、砂場で穴を掘って遊ぶ幼児など、自分のやりたいことを見つけて楽しんでいた。

この頃、担任は幼児同士で誘い合って、集まって遊ぶ姿が増えてきたことを感じていた。Ⅲ期は「好きな遊びをしながら、友達のいる場で遊ぶことを楽しむ時期」であり、「教師を介さなくても幼児同士で遊ぶ姿が見られるようになってくる」時期である。一人一人の遊びが充実してくると、自然と幼児同士のかかわりがうまれてくるのではないかと考え、まずは一人一人がやりたいことに夢中になって遊べるように幼児の様子をよく読み取っていこうと副担任と保育の方向性を確認していた。

10月7日

H児：「魚釣りするよー！」長い木の枝を持って、テラス付近に担任を呼びに来る。  
担任：「何、何？面白そうだね。どこですか？」  
H児：「池だよ。早く行こう」  
担任：「うん。行こう、行こう」  
走って池まで行くと、持っていた木の枝の先に落ち葉を付け、池の中に入れる。  
H児：「ほら、釣れたよ！」木の枝を池から持ち上げる。  
担任：「本当だ。私も釣りたい！」  
H児：「いいよ。じゃあ、これで釣って」近くに落ちていた木の枝を担任に渡す。  
H児：「スイスイスイスイ…」  
自分が池の中に入り、葉っぱを手に持って水中に入れ、担任の持つ木の枝付近まで来る。  
担任：「釣れないかな」  
H児：「ペタッ！釣れたよ」担任の持つ木の枝を持ち上げる。  
担任：「本当だ、本当だ。やったー！」  
H児：「もう1回やってもいいよ」  
担任：「うん、ありがとう」  
I児：「ぼくもやりたい」  
H児：「いいよ。じゃあ、これ持って」  
I児：「うん」木の枝を手に持ち、先を池に付ける。  
H児：「スイスイスイスイ…。ペタッ！」  
I児：「やったー！」  
担任：「Iちゃん、やったね」  
J児：「ピチャピチャピチャ…」  
担任：「あれ？お魚の音が聞こえてきたよ」  
I児：「本当だ！」  
J児：「ピタッ！」担任の木の枝の先に葉っぱを付ける。  
担任：「やった！」  
4人で繰り返す。  
H児：「先生、釣った魚は焼いて食べれるんだよ」  
担任：「へえ、いいね。私も食べたいな」  
H児：「今日は焼けないな」  
担任：「そっか。残念。また今度お願いね」

H児は、朝の支度を終わると園庭に出かけて行った。担任が朝の受け入れを終え、外に出る支度をしていると、H児が木の枝を手に持って、保育室前のテラスに戻ってきた。「魚釣りするよ！」の声に、担任もわくわくした気持ちになり、H児と一緒に池まで走って行った。すると、近くにいた他の幼児も一緒に池に向かって走っている様子が見られた。担任は、以前他園との交流の中で聞いた「こどものせかいをみることの大切さ」を思い出し、H児がどんなイメージで魚釣りをしようとしているのかをよく読み取ろう

と、H児の様子を見守った。H児は、手に持っていた木の枝の先に近くに落ちていた葉っぱを差し込んで取り付けると、池の中に枝の先を付け、じっとしていた。しばらくすると、「釣れたよ！」と木の枝を持ち上げ、担任に見せた。担任は木の枝を釣竿に、葉っぱを魚に見立てているのだと捉えた。近くにいた他の幼児もH児の様子を見て、そのイメージを捉えようとしていた。担任は、自分がH児の遊びの仲間になることでH児の遊びを支えたいと考え、「私も釣りたい」とつぶやいた。すると、H児は近くにあった木の枝を担任に持たせ、自分は池の中に入った。担任は、どのような魚釣りになるのかとH児の動きを見ながら、池に木の枝を付けた状態で、じっと待つことにした。するとH児は「スイスイスイスイ…」と言いながら、池の中を手に持った葉っぱを泳がせるように担任のもとへやってきた。担任の近くまで来ると、手に持った葉っぱを担任の持つ木の枝の先に「ペタッ！」と言いながらくっつけ、木の枝を持ち上げた。担任は、H児が魚役になり、魚に見立てた葉っぱを池の中で泳がせ、釣竿に見立てた木の枝にくっつけることで魚釣りを表現しているのだと捉えた。近くでその様子をじっと見ていたI児もそのイメージを共有したのか、「ぼくもやりたい」と仲間に入った。また、J児はH児がやっていた魚役になりきり、遊びの仲間に入った。

この日の振り返りタイムでは、H児がこれまでの経験から「幼稚園でも釣りをやってみたい」という思いをもったのではないかと振り返った。そして、担任がH児の思いを読み取り、遊びの仲間になって一緒に楽しんだことで、H児の楽しい雰囲気が他の幼児にも伝わり、自然とかかわりがうまれたのではないかと考えた。また、H児が「釣った魚は焼いて食べれるんだよ」と言っていたことから、今後釣った魚を料理する遊びに発展する可能性も視野に入れながら、援助していこうと副担任と共有した。そして、池の周りに釣竿になるような木の枝やサツマイモのつるなどを置いたり、魚になるような葉っぱを集めておいたりすることにした。

10月15日

I児、K児、L児が池で釣りの遊びを始める。しばらくして、H児が池の近くを通りかかる。

H児：「いーれーて」

I児、K児、L児：「いいよ」

H児：「スイスイスイスイ…ペタッ！」

K児：「やったー！」木の枝を持ち上げる。

K児：「はい、次はLちゃんね」

L児：「うん、ありがとう」

しばらく魚釣りを続ける。

H児：「そうだ！あっちのロケットでも、釣りができるよ」

担任：「何？ロケット？」

I児：「ロケット？」

H児：「うん。あっちにロケットあるよ。ロケットでも釣りができるんだー」園庭の築山を指さす。

担任：「えっ？楽しそう」

K児：「私もやりたーい」

H児：「じゃあ、みんなで行こう」築山に向かって走る。

H児：「ここ、ここ！ここに座って釣りできるよ」

H児は築山のトンネルの上を指さす。

I児、K児、L児はトンネルの上に移動する。

H児：「これを持って」長いつるをI児に渡す。

I児：「ぼくやる」つるをトンネルの下に垂らす。

H児：「スイスイスイスイ…ペタッ！釣れたよ！」

I児：「やったー！」

担任：「へえ、ロケットでも釣りができるの、楽しいね」

4人は順番に築山での釣り遊びを続ける。

M児：「何やってるの？」

H児：「釣りだよ。ロケットから釣りができるの」

N児：「やりたーい」トンネルの上に上る。

H児：「じゃあ、これを持って」つるをN児に渡す。

N児：「釣れないかな？」つるを下に垂らして待つ。

H児：「スイスイスイスイ…ペタッ！」  
N児：「やったー！もう1回やる」つるを下に垂らして待つ。  
M児：「釣れてるよ」近くに落ちていた葉っぱを拾ってきて、N児の持つつるに付ける。  
N児：「本当だ」  
H児：「こんなのも、釣れるよ」近くに落ちていたどんぐりや花を見せる。  
担任：「へえ、いろいろなものが釣れるんだね。おもしろいね」  
M児：「いいね。ぼくも探してくる」

釣りの遊びが始まって1週間。池では、多くの3歳クラス児が釣りの遊びを楽しんでいた。時には、年上の幼児が遊びに加わったり、5歳クラス児が釣竿をつくって持ってきてくれたりすることもあった。この日、H児は他の幼児と園庭の築山付近で遊んでいた。I児やK児、L児が池で釣りの遊びを始めると、たまたま通りかかったH児も釣りの遊びに加わった。I児、K児、L児の3人は、1つしかない先の曲がった木の枝を順番に使い、池に浮かぶ魚に見立てた落ち葉をひっかけるようにして釣って遊んでいた。H児が遊びに加わってしばらくすると、H児が「ロケットでも釣りができるよ」と話した。担任は、魚釣りが魚の料理づくりに発展するのではないかと考えていたが、H児の「ロケットでも釣りができる」という発想に驚き、この思いを大切にしていくことが「こどものせかいをみること」なのではないかと考えた。担任は、H児が池で釣りの遊びに加わるまで、築山をロケットに見立てて遊んでいたのではないかと読み取り、そのイメージが他の幼児にも伝わるように、問い返した。すると、他の幼児もそのイメージを共有し、一緒にやりたいという思いをもった。築山まで走って行くと、H児がそのイメージを他の幼児に伝えた。担任はその様子を見て、自分たちでイメージを共有し、遊び始められるのではないかと考え、近くで様子を見守ることにした。4人が順番にロケットでの釣りの遊びを続けていると、生き物探しをしていたM児とN児が通りかかった。M児とN児が釣りの遊びに興味をもつと、H児がそのイメージを伝え、2人が遊びに加わるようになった。

この日の振り返りでは、H児の発想から釣りの場を変えたことで、普段釣りの遊びに加わることのなかったM児やN児が釣りの遊びを知り、その楽しさを共有することにつながったのではないかと振り返った。そして、楽しい遊びをしているところには自然と子どもたちが集まってくることを再確認し、幼児の発想や思いを大切に、遊びを充実させていこうと考えた。引き続き、池の周りに釣りの遊びができそうな木の枝やつる、葉っぱを集め、必要に応じて料理道具がすぐに使えるように環境を整えた。

10月22日

H児、J児、K児、L児、O児、P児は池で釣りの遊びをする。  
H児：「じゃあ、ここにみんなが釣った魚を入れて」池の脇にバケツを置く。  
H児：「ここに入れたら、焼いて食べれるんだよ」  
担任：「いいね。前にHちゃん、焼いて食べれるって言ってたもんね」  
H児：「うん。今日は食べれるよ」  
担任：「やったー！楽しみ」  
P児：「えー、焼くの？」  
J児：「いいね。これも入れるね」  
K児：「これも入れていい？」  
H児：「いいよ。いっぱい入れて」  
O児：「いっぱい釣れたね」  
担任：「わあ、本当だ。いっぱいになってきた」  
H児：「じゃあ、次はお料理しますね」  
P児：「お料理？」  
担任：「わあ、何が食べられるか、楽しみ」  
H児：「じゃあ、あっちでお料理しますね」  
3歳クラステラス付近の砂場まで移動する。P児もついていく。  
H児：「ここで、お料理しまーす」  
P児：「私もする」  
担任：「お魚で何のお料理になるのかな」  
H児：「今日は、お魚オムライスですよ」  
P児：「えー、おいしそう。おなべ持ってきたよ」  
H児：「ありがとう。じゃあ、ここにお魚を入れて」

皿を取りに行く。

H児：「できた！完成！」

皿に料理をうつし、担任の所に持ってくる。

H児：「できました。お魚オムライスで一す」

P児：「私も食べたーい」

担任：「一緒に食べる？」

P児：「うん」

担任：「おいしい！」

P児：「本当だ。おいしいね」

H児とP児が料理をしている間、他の幼児も砂場に移動してくる。

J児：「ここで、魚釣りできないかな？そしたら、すぐにHちゃんにお料理してもらえるのに」

O児：「そうだね…」

J児：「あっ！いいこと思い付いた！ここを池にしたらいんじゃない？」

O児：「いいね」スコップを取りに行く。

O児：「はい、先生も掘って」

担任：「どこを掘ったらいいの？」

J児：「ここだよ。ここを池にするの」

担任：「へえ、ここが池になるの？楽しみ」

K児：「私も掘る」

L児：「私も」

J児：「やめて！みんなでやったら壊れちゃうよ」

K児：「私もやりたい！」

J児：「でも壊れちゃったじゃん」

K児：「私もやりたかったの」

H児：「じゃあ、順番にやったら？」

J児：「うーん。じゃあ、ここならいいよ」

K児：「うん」

J児：「私、水持ってくるね」

L児：「私も持ってくる」

J児：「水、入れるよ」

O児：「OK！」

J児とM児が掘った穴に水を入れる。

L児：「わあ、池になった」

J児：「お魚釣ろう！」

O児：「お魚入れないと」葉っぱを持ってきて、砂場の穴に入れる。

L児：「私、釣りたい」

J児：「いいよ」木の枝を渡す。

L児：「やった！釣れた！」

J児：「Hちゃん、釣れたよ！お料理つくって」

H児：「うん。分かった。お料理するね」

この日、H児は多くの3歳クラス児と一緒に池で釣りの遊びをしていた。しばらくすると、何かを思い付いたのか、バケツを持ってきて、他の幼児に声をかけた。担任は、H児がみんなの釣った魚を集めて、その魚で料理をしたいという思いをもっていると読み取った。以前H児が「釣った魚は焼いて食べれるんだよ」と語っていたことを思い出し、今釣った魚で料理をしたいという思いが高まったのだと捉えた。そして、担任はH児の思いが実現するように願い、必要に応じて声かけをしたり、遊びの仲間に入れるようにしたり、いくつか援助の方法を考えながら、近くでその様子を見守った。H児の料理づくりに興味をもったP児がH児と一緒に砂場に移動し、一緒に料理をする様子から、担任は2人のかかわりを見守りながら、近くで料理ができあがるのを待つことにした。しばらくすると、池で釣りの遊びを続けていた他の幼児も砂場に集まってきた。H児とP児が砂場脇のテーブルで魚の料理をしていることを知ると、料理をしている場の近くで魚釣りをしたいという思いをもった。J児が砂場に穴を掘って池をつくることを提案すると、他の幼児も賛同

し、一緒に穴を掘ったり、水を入れたりして、池をつくろうと動き出した。担任は、以前雨が降った日に砂場に水がたまっている様子を見た3歳クラス児が「池みたいだね」と言っていたことを思い出し、きっとJ児はこれまでの経験から、砂場に水をためると池のようになることを思い付いたのではないかと捉えた。J児の発想に驚くと共に、幼児がそれぞれやりたいことを見付け、自然と役割分担して、遊びを展開していく姿に大きな成長を感じた。そして、少しのいざこざがあっても自分たちで話し合い、なんとかしようとしている姿に感動した。

この日の振り返りでは、H児が釣りの遊びを始めた頃「釣った魚は焼いて食べれる」と言っていたことを共有し、いつかH児の気持ちが料理に向いたときにそれが遊びにつながり、料理づくりを楽しむ他の幼児とのかかわりにもつながるのではないかと捉えていたことを振り返った。この日、H児の発想から魚の料理づくりだけでなく、砂場に池をつくる遊びにつながったことを副担任と共有した。焦らずに待つことの大切さを感じると共に、幼児の思いが高まったとき、幼児は自分たちで様々なことを考え、工夫しながら遊びをつくることができるのだと改めて再確認する出来事になった。

## 考察

H児の釣りの遊びは1か月以上も続いた。その間、全ての3歳クラス児がこの釣り遊びを楽しんだ。多くの幼児がイメージしやすい「釣り」という遊びだったことや、釣りの場である池が園庭と保育室をつなぐ位置にあり、通りすがりの幼児が遊びに加わることができたということで多くの幼児の楽しみになったのではないかと考えた。さらにこの釣りの遊びを通して考えたことは、やはり楽しいことをやっているところには多くの幼児が自然と集まるということである。多くの幼児が集まることで、自然とかかわりがうまれる。そのかかわりの中で幼児は多くのことを学ぶ。そのことを実感した遊びであった。かかわりが増えてくれば必ずトラブルが起こる。それは、遊びに夢中になっている証なのである。それをどのような学びの場にしていくかは、保育者にかかっているのではないかと考える。幼児同士で何とかしようと考えている様子があれば見守りに徹し、自分たちで何とかしようとする姿を称賛してきた。

遊びが充実すれば、何か困ったことがあっても、自然と自分たちで考え、工夫する姿につながるが見てとれた。遊びを充実させることがかかわりにつながることを実感した。今後も幼児一人一人の楽しみは何かをよく読み取りながら、それぞれの遊びが充実するように援助していきたい。

## <3歳クラス IV期 1・2月> やりたい思いを高める環境構成

### これまでの保育の様子

天気によって、屋内で遊ぶことが多い季節になった。屋内でも自分でやりたいことを見付け、存分に楽しめるように環境を整えていこうと考えた。幼児は、遊戯室や保育室などを行き来しながら、自分の楽しみを見付けていった。遊戯室では、積み木を並べたり、積んだりして、家や乗り物に見立て、ごっこ遊びを楽しんでいた。また、保育室では廃材を使って製作遊びを楽しむ幼児が多くいた。

IV期は、「周囲とかかわりながら、自分の遊びを広げていく時期」である。また、2月にはお楽しみ発表会が行われる。普段の遊びを充実させることが、発表会で「やってみたい」という思いにつながるのではないかと考え、幼児がやりたいと思えるような環境を整えることで、自然なながれで発表会を迎えたいと考えた。2学期後半には、4歳クラス児からポリ袋を使った衣装づくりを教えてもらい、数名の3歳クラス児が自分でつくれるようになっていた。つくった衣装を毎日着てから遊び始める様子を見て、幼児がいつでも手の届く所に衣装を置いておく場があることで、自分たちの好きなときに衣装を脱ぎ着できるのではないかと考え、ロッカーとロッカーの間にハンガーで衣装をかけておく場をつくった。また、幼児の遊びの様子からヒーローごっこの武器等をつくりやすいような空き箱を多く準備し、いつでも好きなように使えるように環境を整えた。

この日の登園前、保育室にホワイトボードを用意しておいた。担任は、発表会では発表会のために事前に決めたことを発表するのではなく、夢中になれる遊びがあって、「見せたい」という思いから発表につながるようにしたいと願って、ホワイトボードを置くことにした。ホワイトボードには、幼児が発表会で家の人に見せたいと言ったものを写真やイラストで示し、幼児がわかりやすいようにした。また、写真の脇には、幼児一人一人の名札を用意し、誰が何をやりたいのかを示せるように準備した。朝登園した幼児は、ホワイトボードの前に集まり、「私は、〇〇やる!」「ぼくは、△△!」と自分の名札を動かしていた。中には、「私、◇◇やりたいから、つくって」とイラストをお願いに来る幼児もいた。

1月31日

#### 【みんなの時間】

担任：「今日は、お部屋で見せられるみたいだよ」

3歳クラス：「やった!」「ぼく、〇〇やりたい!」

担任：「何見せたいか、教えて」

やりたいことが貼られているホワイトボードに名札を貼っていく。

担任：「Rちゃん、どうする?」

R児：「やらない」

担任：「そっか。分かったよ。ここに貼っておくから、やりたくなったら、教えてね」

#### 【午後の遊びの時間】

R児：「もうRちゃん、やること決まってるんだ」

担任：「そうなんだ。何見せたいの?」

R児は、側転をやって見せた。

担任：「すごいね。Rちゃん」

R児：「うん。Rちゃんは運動神経がいいから、できるんだ!」

担任：「へえ、みんなびっくりするんじゃない?」

R児：「うん!」

担任：「そうだ! Rちゃんの今のやつ、紙つくってこようか?」

R児：「うん」

担任は、副担任に状況を説明し、事務室で側転のイラストを準備する。

担任：「できたよ! これでいい?」

R児：「うん」

担任：「ここに貼る?」イラストを貼る。

R児：「うん」自分の名札を紙の下に隠すように貼る。

担任：「これ、みんなに内緒ってこと?」

R児：「そうだよ。Rちゃん、見せないもん」

担任：「へえ、そうなの？みんなびっくりするんじゃないかな」

午前の遊びが終わり、「みんなの時間」に初めての発表会ごっこを行った。この日は、自分のやりたいことを決め、保育室で互いに見せ合うスタイルで行った。担任が、一人ずつ「何見せたい？」と問うと、それぞれやりたいことを口にした。担任は、幼児の思いを聞き、その子の名札をイラストの脇に貼っていった。R児は、不安そうな表情でその様子を見ていた。担任がR児にどうしたいかと聞くと、「やらない」と答えた。担任は、いつかR児がやりたいという思いになることを願って、R児の名札をホワイトボードの端に貼り、「やりたくなったら、教えてね」とだけ伝えた。その後、行った発表会ごっこでは、自分の椅子からは立ち上がったものの、みんなの前に立つことはなかった。しかし、その表情はにこやかで、その状況を楽しんでいるかのように見えた。担任は、そのR児の表情を見て、何か小さなきっかけがあれば、いつかみんなの前に立てるのではないかと、そしてそれがR児の自信につながるのではないかと捉え、R児がやってみたいと思えるように環境を整えていこうと考えていた。

午後の遊びの時間になると、R児がそっと担任に近づいてきて「Rちゃん、もうやること決まってるんだ」とつぶやいた。担任は、R児が自分でやりたいことを決め、担任に知らせに来たことをうれしく思い、R児の話を聞いた。すると、R児は他の幼児から見えないような所に移動すると、側転をして見せた。担任は、R児の今の思いを大切にしたいと思い、遊戯室にいた副担任のところに行き、R児が側転をやりたいと見せてくれたこと、今R児のためにホワイトボードに貼るイラストを作成してきたいことを伝え、R児と一緒に事務室へ急いだ。担任は側転の様子が分かるようなイラストを探し、R児に確認すると、R児と一緒にホワイトボードに貼った。すると、R児は自分の名札をイラストの用紙の下に隠すように貼った。担任が「これ、みんなに内緒ってこと？」と言うと、満面の笑みを浮かべながら「見せないもん」とつぶやいた。言葉では、「見せない」と言っていたものの、そのR児の表情は自信に満ちあふれていた。このホワイトボードがあったことで、R児のやってみようという思いが、かたちになり、R児の自信につながったのではないかと捉えた。

振り返りでは、ほとんどの幼児がホワイトボードに興味を示し、名札を貼ることによって、自分の意思を示すことにつながっているのではないかと振り返った。また、名札の裏にはマグネットを貼り付けてあり、自由に動かせることで幼児がいつでも自分のやりたいことを変えることができ、幼児のそのときのやりたい思いに寄り添える環境になっているのではないかと共有した。次の日から、このホワイトボードは保育室に置いておくことにし、遊びの時間でも自由に名札を動かしてよい環境にしておくことを確認した。そして、保育者が遊びの援助をする際にも、この名札の位置を参考にしながら、今それぞれの幼児の楽しみは何かをよく読み取っていこうと共有した。

## 2月12日 発表会当日

担任：「今日は、おうちの人が見てくれる日だね」

3歳クラス：「うん！」「楽しみ！」

担任：「じゃあ、今日は何見せたい？」

自分の見せたい物のところに名札を貼っていく。

担任：「Sくんはどうする？」

S児：「Sは、これ！」ホワイトボードを指さす。

担任：「何か、おいしいもの見せたいの？」

S児：「うん！」

担任：「いいね。何見せるの？」

S児：「お弁当！」

担任：「いいね！おいしそうなのつくってたもんね。みんなびっくりするね」

保育室での発表会ごっこの後、遊戯室でも数回発表会ごっこを行った。その際、遊戯室へ出る前にはいつもホワイトボードで、それぞれの幼児がその日見せたいものは何かを確認してから、発表会ごっこに臨んでいた。毎回違うことを選び、楽しんでいる幼児もいれば、友達と一緒に「今日は一緒に〇〇しよう」と相談している幼児もいた。

発表会当日、担任はホワイトボードの前に、「今日は何見せたい？」と聞こうかどうしようか迷っていた。このまま「今日はこの順番でやろうね」と伝えることもできる。発表会が始まる数分前の今、今までやったことのないものを見せたいと言われたらどうしようと思っていたからである。しかし、発表会の主人公は子

ども。それぞれの幼児がそのときやりたいこと、見せたいことを保育者が制限すべきでないと考え直し、いつも通り「今日は何見せたい？」と尋ねることにした。すると、それぞれ自分のやりたいことに名札を貼る幼児がいる一方、S児は最後まで名札を貼らなかった。担任は、ドキドキしながら「Sくん、どうする？」と尋ねると、これまで見せたことのない食べ物のイラストを指さした。S児は廃材の箱や折り紙、毛糸などでつくったお弁当を見せたいとのことだった。担任は、インタビューの時どんなことを聞いたらいのだろうかと思いついたが、これまで遊びの中でS児が工夫しながらお弁当をつくっていたこと、それぞれの具材にはS児の思いが詰まっていることを読み取っていたので、それを家の人に知ってもらえたらと考え、発表会の会場である遊戯室へ向かった。発表会では、S児をはじめどの子も自分のやりたいことを存分に表現していたのではないかと振り返った。発表会が終わってすぐ、幼児から「もう1回やりたい」「明日は、〇〇やりたい」という声があがった。担任はもっとやりたいという幼児の思いを大切にしたいと考え、その日の発表会で使った衣装やつくったものは持ち帰らずに、そのまま保育室に置いておくこと、これまで使っていたホワイトボードを幼児の目の届くところに置いておくことにした。

2月13日

T児：「今日は、ヒーローやる！」  
担任：「いいね！今日も発表会やるってこと？」  
T児：「うん。やるよ」  
担任：「いいね。やろうやろう！」  
T児：「ぼく、みんなみたいな服が欲しいんだよ」  
担任：「どういうこと？」  
T児：「Uくんが着てるやつ」  
担任：「あれ、かっこいいもんね」  
U児：「これ？」  
T児：「ぼくも欲しい」  
U児：「いいよ。つくってあげるよ」  
T児：「やった！」  
担任：「よかったね」  
T児：「うん！」  
U児：「じゃあさー、袋ちょうだい」  
担任：「袋？袋が必要ってこと？」  
U児：「そうだよ。袋でつくるから」  
T児：「袋、くーだーさい」  
担任：「分かったよ。何色がいいのかな？」いろいろな色の袋を見せる。  
T児：「ぼくは、黒にする」  
担任：「はい、どうぞ」  
U児：「ありがとう。Rくん、これどうすればいいの？」  
T児：「はさみで切るんだよ。先生、はさみ貸して」  
担任：「うん。分かったよ」  
U児：「ここが頭だから、ここを切って」  
T児：「できない」  
U児：「ぼくがやろうか？」  
T児：「うん。つくって」  
U児がつくり方を説明しながらつくり、T児はその様子を近くで見ている。  
U児：「できたよ」  
T児：「ありがとう」  
U児：「ここに手を入れて」T児に着せてあげる。

この日、多くの幼児が「昨日、発表会楽しかったね」「今日も発表会やりたい」と言いながら登園した。T児は朝から「今日はヒーローをやる！」と言っていた。朝の支度が終わると、ヒーローの曲に合わせて、ポーズをとって遊ぶことを繰り返した後、「みんなみたいな服が欲しい」という思いをもった。きっとこれまでの発表会ごっこや発表会での他の幼児の発表を見て、自分もやってみたいという思いにつながったのではないかと捉え、T児が自分で楽しみを見付け、遊びを広げていることにうれしくなった。担任



は、以前の自分なら「発表会前につくればよかったのに」と考えていたかもしれないと振り返り、このときT児の遊びが広がったことを心からうれしく思えたのは、副担任との振り返りやカンファレンスを通して、発表会を日常の遊びの一環と心から思えるようになっていたからではないかと捉えた。さらに、T児はすでに衣装をつくって着て遊んでいたU児に自分の思いを伝え、衣装をつくってほしいとお願いしていた。T児とU児が自分たちでやりとりをしながら、衣装をつくりあげていく姿に大きな成長を感じた。

そして、「今日も発表会をしたい」と願う3歳クラス児の思いを大切にしたいと考え、遊びの時間の間に3歳クラス児の思いを5歳クラス、4歳クラスの職員に伝え、「みんなの時間」にもう1度発表会をやらせてほしいとお願いした。すると、「いいじゃないですか」「やりましょう、やりましょう」と快く受け入れていただき、実際に発表会ごっこをやらせてもらえることになった。5歳クラス児、4歳クラス児にも観客として参加してもらい、3歳クラス児はどの幼児も満足そうに発表会ごっこを終えた。T児も遊びの時間にU児と一緒につくった衣装を身に着け、ヒーローショーの発表を楽しんでいた。

この日の振り返りでは、発表会後であるからこそ、幼児の遊びが充実していたのではないかと振り返った。発表会での他の幼児の発表をきっかけに、「自分もやってみたい」という思いが高まり、遊びの幅が広がったのではないかと捉えた。発表会までアイドルのダンスを楽しんでいた女兒が、この日の発表会ごっこでは1人でヒーローになりきって、みんなの前で発表をやりきった姿からも、そのことがうかがえた。幼児の思いを大切に、他のクラスの職員とも連携し、幼児の思いを叶える場をつくったことが幼児のさらなる楽しみにつながったのではないかと振り返った。

## 考察

発表会に向けて、繰り返しカンファレンスを行う中で、「発表会がゴールではない」「発表会は遊びの延長線上にある」ということを確認し、大事にしていこうと考えていた。発表会に向けての教師の役割は、幼児の思いをいかに高められるかだと捉えていた。そこで、教師は幼児が自信をもって「やりたい」という思いをもつことができるように、環境を整えていこうと考えた。

幼児が自分で好きなように道具を使えるように保育室の環境を整えたことで、幼児の遊びの幅が広がり、幼児同士がやりとりの中で一緒に遊びをつくりあげる姿が見られた。また、その時幼児が発表したいことを発表できるように、ホワイトボードで視覚的に示し、名札を貼ることで幼児の意思を示せるようにしたこと、幼児のやりたい思いに寄り添うことができたのではないかと考える。そうすることで、発表することに不安をもっていた幼児も安心して発表の場に立つことができたのではないかと考える。今年度の研究会講師の先生が「行事は幼児の日常に潤いを与えるもの」とお話しされていた。まさにお楽しみ発表会が幼児の日常に潤いを与えるものであったのではないかと改めてその言葉の意味を実感した。幼児にとって、発表会がゴールではなく、通過点になっていたのであればうれしく思う。

## < 4歳クラス V期 4・5月 > 遊び出しを支える環境構成

### これまでの保育の様子

4歳クラスのこの時期は、進級したことに喜びを感じており、張り切って遊んでいる。しかし、保育室の場所や、担任・副担任が変わる経験は初めてであり、戸惑いを感じたり不安な様子を見せたりする幼児もいた。また、新入園児や年下の園児に対して、自分から声をかける姿から「優しくしたい」「一緒に遊びたい」という気持ちをもっているのではないかと読み取った。これまでとは違った新しい環境になじめるように、一人一人の遊びの様子をしっかりと読み取り、思いや願いに寄り添いながら、安心して遊べる場をつくっていかうと、副担任と思いを共有した。そのために、これまでに経験した遊びを思い起こし、好きな遊びに夢中になれるような環境構成を工夫することが大切であると考えた。また、春になって植物がすくすくと育ち、園庭のいたるところで生き物が見られるようになる季節なので、天気の良い日はできるだけ自然環境に目を向けて遊べるようにしたいと願い、テラスに机やいすを配置したり、生き物に関する本や飼育ケースを目の届く場所に配置したりして環境構成を行った。

A児は4月後半から、登園の際に表情が曇り、気持ちが沈むような様子が見られた。朝、登園後に母親と離れる時に「ママと一緒にいい」と泣いていることが多くなった。しばらくの間、登園後は母親と一緒に、荷物の片付けや手洗い、うがいなどの朝の支度を行い、遊び始めるまでの時間を母親と一緒に過ごした。A児は、母親と一緒にいる間は落ち着いているが、母親が離れると顔が曇って泣く日が続いていた。

しかし、少し落ち着くと「Bちゃんと一緒に遊びたい」と、気の合う友達を探したり、自分のしたいことや思いを担当に伝えたりしていた。もし、好きな遊びを見つけて遊び出すことができれば、新しい環境に慣れ、安心して園生活を送れるのではないかと考えた。そこで、A児が好きな遊びや、興味をもつ遊びを探り、すぐに好きな遊びができるような環境をつくっていかうと援助の方向性を確認した。

ある日、手遊びをしていると、A児が担任の真似をして、楽しそうに手遊びをする姿があった。また、帰りの支度をする時に音楽をかけて担任が歌い始めると、他の幼児と一緒に身振り手振りをしながら、A児が楽しそうに歌っていた。A児にとって、歌って表現することは好きなことの一つなのかもしれないと捉えた。そこで、これまで担任が操作をしていたCDデッキを、幼児が操作しやすいようにラベルを貼って室内の窓際に置き、遊びの時間に自由に使えるようにした。

4月24日

A児：「これって、どうやって音出すの？」

担任：「ここを押したらいいのかなあ？」

C児：「ちょっと貸して。これは、ここを最初に押して、これを押すの」

担任：「なるほどね」

A児：「すごい、ありがとう」

D児：「じゃあ、どれにする？」

A児：「あの曲あるかなあ。どうやって次のやつにするの？」

C児：「ここだよ、ここ」

ボタンを押しながら、曲を選ぶ。

A児：「これがいいんじゃない？」

D児：「いいね。踊ろう！」

E児：「ここに、いす並べて、お客さんが座れるようにしたらいいんじゃない？」

E児：「それ、いいね。そうしよう」

担任：「すごい、楽しそうだね」

A児：「うん、踊ってるの！」

D児：「今、発表するから、こっち側で見てて」

担任：「ここに座っていいの？楽しみだなあ」

A児：「じゃあ、どれで踊る？」

窓際に置いたCDデッキを操作しようとするA児が、どのボタンを押すと好きな曲を流せるのかがよく分からず、困っていた。そこへ操作が得意なC児が来て、曲を流すことができるようになった。A児は、自分が好きな曲があるようで、曲の前奏部分を聴きながら、どれにするかをD児やE児と一緒に選んでいた。自分たちが選んだ音楽が流れると、それに合わせて楽しそうに歌ったり踊ったりする幼児の姿があった。A児も笑顔で跳んだり歌ったりして、思い切り体を動かしながら表現を楽しんでいる様子から、音楽に合わせて歌ったり踊ったりすることは、A児の楽しみの一つなのだと改めて感じた。また、E児は保育室にある椅子を並べ、初めてお客さんが座れるような場所をつくり始めた。担任は、観客としてその椅子に座った。A児は他の幼児たちと一緒に、張り切って踊っていた。

CDデッキを操作する際に必要なボタンにラベルを貼って分かりやすくしたが、最初は操作に戸惑う様子

が見られた。しかし、機械操作が得意なC児が、好きな曲の選び方や音楽の流し方を覚えて、率先して使い方を周りの子に伝えており、A児も他の幼児たちと一緒に曲選びをしていた様子から、これから好きな時に好きな曲で踊ったり歌ったりする場ができると感じたのではないかと捉えた。また、E児を中心として保育室にあった椅子を並べ、観客席をつくり始めた。他の人にこの姿を披露したいという気持ちがあると読み取った担任はその場に座って、幼児たちが音楽に合わせて踊ったり歌ったりする姿を見ながら、手拍子をした。A児と目が合った時は、とてもうれしそうな笑顔を浮かべて友達と一緒に踊っており、表現することを楽しんでいたのでないかと捉えた。CDデッキを幼児が操作しやすい場所に置いて、音楽を自由に流せるようにしたことにより、踊ったり歌ったりすることが好きなA児の遊び出しがスムーズになると感じた。そこでしばらくCDデッキを室内の窓際に置いておくと、自分たちで音楽を流し、それに合わせて歌ったり踊ったりする幼児がいた。また、帰りの集まりの際は、幼児たちが好きな音楽を流し、支度が終わった子から一緒に歌を歌った。A児も張り切って帰りの支度をして、みんなと一緒に歌っていた。

また、踊ったり歌ったりすることを他の人に見てもらえることは、A児の大きな喜びにつながるのではないかと捉え、もっとたくさんの人にこのA児の姿を見てもらうことができれば、A児の喜びや楽しみが増えることにつながるのではないかと考えた。そこで5月中旬、副担任と相談をして、テラスにステージとなる場を設置することにした。すのこを敷き、テラスのマットの位置を移動させて、上履きのままでも気軽にすのこのステージへ行けるようにした。また、体を十分に動かすことができるような広いスペースを確保した。そして、テラスでもCDデッキが操作できるように、すのこの近くにCDデッキを置くためのテーブルを用意した。

5月22日

A児：「ここにビールケース、持って来ようよ」

E児：「いいよ、運ぼう」

A児：「歌、どうする？」

E児：「これにする？」

A児：「いいよ、これにしよう」

C児とF児が加わり、4人で曲に合わせて歌う。担任が観客となり、歌に合わせて手拍子をしていると、3歳クラス児が近くに来る。

担任：「4歳クラス児さんたち、素敵な歌を歌ってるね」

F児が足を踏み外す。

担任：「大丈夫だった？これからどうしたらいいかな？」

E児：「じゃあさ、落ちないように、こうやって1段にする？」

A児：「いいかも。広くした方がいいんじゃない？」

2段になっていたビールケースを下ろして、1段の広いステージをつくる。

E児：「これ、いいねえ」

A児：「広くなった！靴、脱ごうかなあ」

A児は、靴を脱いで広いスペースを歩く。

A児：「次、何の歌にする？」

すのこのステージを設定した次の日、A児は登園すると母親と離れる時に少し不安そうな表情を見せていたが、泣かずに部屋へ入り、朝の支度を始めた。そして、E児がビールケースを運んでつくり始めたステージを、A児も一緒につくっていた。前日の他の幼児たちの楽しそうな様子から「自分も一緒にやりたい」というA児の気持ちを高めたのだろうと感じた。ステージができあがると、CDデッキを操作して、歌いたい曲を相談しながら選んだ。そして、二段に重ねたビールケースの上に立ち、他の幼児たちと一緒に大きな声で歌を歌った。その歌声が園庭に響きわたり、他の幼児たちが集まって来た。保育室で歌っていた時は、そこにいる幼児とのかかわりしかなかったが、テラスのステージではたくさんの人に見てもらえることができ、歌ったり踊ったりすることが好きなA児にとって、新たな楽しさを得たように捉えた。

副担任との振り返りタイムでは、ステージを設定することで、歌ったり踊ったりすることを、楽しんでいける様子が見られたことが話題になった。音楽や歌声に耳を傾けながら、ステージの近くを通りかかる幼児や職員が観客となり、見てもらえることへの喜びが、さらに遠くまで声を響かせようとして歌うなど、表現を豊かにしているように見えた。ビールケースを自分たちで運んで重ね、段をつくるステージにすることまで、初めは予想していなかったが、それだけこの場に幼児が興味をもっているのだと捉えた。そして、安全のために1段にすることを思いつき、自分たちで新たなステージの形をつくり、A児がそのステージを歩く姿から、自分たちのステージをとっても気に入っているように捉えた。また、A児が思いっきり自分を表現する姿を見て、それがA児にとって夢中になれる遊びの一つであると捉え、この遊びが継続するように援助していくことを共有した。

そこで、A児がいつでもすぐに遊び出すことができるようにするため、普段は保育室から少し離れた場所

に置いてあるビールケースを、幼児が目に入る位置であるテラスのステージ近くに、数個置いておくことにした。

5月24日

A児：「ここにも置く？」  
担任：「もうステージができてるの？すごい！今日は何の歌かな？」  
G児：「これから、ここで踊るから！」  
担任：「わあ、楽しみにしてるよ」  
ステージが完成する。  
H児：「どの歌にする？これ？」  
A児：「それじゃなくて、これにしようよ」  
G児：「いいね」  
担任：「素敵！今日はダンスなんだね」  
A児：「そう、アナ雪だよ」  
教育補佐員：「わあ、とっても楽しそうだね」

その日の午後、A児はB児を誘って、ステージに上がった。

A児：「Bちゃん、一緒にやろう。こっち乗って」  
B児：「何の音楽？」  
A児：「さっきのやつがいいな」  
音楽をかけて、二人で踊り始める。  
担任：「二人とも、ダンスが上手だね。」

この日、A児は登園するとすぐに、G児、H児と一緒にビールケースを運んで組み合わせ、ステージをつくっていた。前日にステージをつくる経験をしていることにより、昨日ステージに立った幼児とは異なる友達と一緒につくっていた。曲を選ぶ時、A児は自分の思いを相手に伝え、大好きなアナと雪の女王のテーマソングに決まると、主人公になりきって生き生きと踊っていた。特にサビの部分は盛り上がり、隣の幼児とぶつかりそうになるくらい腕を広げて踊っていた。担任は、ステージに立っているA児、G児、H児の動きに合わせて、一緒に体を動かした。また、通りかかった教育補佐員も、ステージの幼児に声をかけ、観客となって一緒に楽しんだ。この日A児は、午後もB児を誘ってステージで踊った。初めは二人で踊り始めたのだが、途中からC児とI児が近くに来て、担任と一緒に観客となった。

ビールケースをすぐに見える場所に置いておくことにより、A児が登園後にスムーズに遊びに入り、さらに楽しく遊べるようになるきっかけになったのではないかと考えた。また、A児が登園する時に表情が曇り、母親となかなか離れることができないこと、今後はA児の楽しみを見つけながら安心して園生活を送れるように見守っていきたいということについて、のびのび保育シートで全職員に共有していた。教育補佐員もその状況を把握しており、ステージで楽しそうに踊っているA児の姿を見て、声をかけて一緒にそのステージを盛り上げた。好きな音楽をかけてステージで歌ったり踊ったりしている姿を、他の人に見てもらえることは、A児にとって魅力的な遊びであると捉えた。

5月の半ば頃まで、登園の時に母親との別れ際に泣くことがあったが、その後は日が経つにつれて泣かずに登園できるようになってきた。笑顔で一日をスタートさせることができる日もある。A児が大好きな歌や踊りで自分を表現し、その姿をたくさんの人に見てもらえるという喜びを見つけたことが、A児の安心にもつながったのではないかと捉えた。

## 考察

4歳クラスのこの時期は「新しい環境になじむ時期」であり、A児もこれまでと違った環境に対して、不安や戸惑いがあったのだと考えられる。一人一人の好きな遊びをよく読み取り、それを十分に楽しめるように環境構成を行うことの大切さを実感した。そのために、幼児が「何をして遊んでいるか」だけではなく「どのように遊んでいるか」ということを探ることが大切なのだと感じた。遊んでいる時の表情や発言、何に夢中になっているのか、これから何をしたいのか、何をしようとしているのか、などを読み取って、環境構成を行うことができれば、幼児の遊びがさらに充実して、安心感にもつながるのだと思う。

A児が、音楽に合わせて思い切り踊ったり歌ったりする姿は、本当に生き生きとして楽しそうであった。その姿を大切にしたいと思い、副担任と相談しながら環境構成を少しずつ変化させてきた。自由に曲を選んで音楽を流したり、ステージをつくったりするを通して、A児は友達とアイデアを出し合い「こうしたい」という思いを伝え合い、好きな遊びに夢中になっていた。また、室内からテラスへ遊びの場を移したことにより、他の幼児や職員に披露する機会ができ、それがA児の喜びとなって安心して遊ぶことへつながったのだと感じる。

幼児一人一人がどんなことに興味をもっているのか、日々の遊びの中でよく読み取ることや、それに合わせた環境構成をしていくことが大切であることを強く感じた。A児は、5月下旬頃から登園後に泣くことが少なくなってきて、笑顔で母親と別れることができる日が増えてきたが、今後も引き続き様子をみながら、好きな遊びを十分に楽しむことができるように支えていきたい。

## <4歳クラス VI期 5～7月> 繰り返し試すことを大切に、「やりたい」を支える

### これまでの保育の様子

V期はこれまでの遊びを思い起こして、それぞれの幼児が好きな遊びに夢中になっていた。友達と一緒に好きな生き物を捕まえようと毎日飼育ケースを持って園舎裏へ行ったり、雨どいを何度も組み直して自分の納得いくまで試したり、水の量を調節してちょうどよい固さの泥にして料理づくりを楽しんだりしていた。生活面でも朝の支度や当番の活動などが少しずつスムーズにできるようになってきており、新しい環境にもずいぶん慣れてきた様子である。

5月下旬、園庭にある「みどりちゃん」の銅像をきれいにしようと、5歳クラスから石けんを借りてブラシで洗う遊びをしている幼児がいた。泡の量が増えると、手の平に泡を乗せて息を吹きかけ、小さなシャボン玉を飛ばしていた。同じ頃、部屋にあったハンドソープの泡を、容器に入れてテラスに持ち出し、泡をわたあめに見立てたり、料理づくりに使ったりする幼児の姿があった。担任は、その遊び方の発想に驚いたが、手を洗うために置いてあるハンドソープを、このまま遊びに使い続けていてよいのかという迷いもあった。L児は友達が遊んでいる姿に興味をもち、水を入れたグラスの上に泡を乗せた飲み物などをつくっていた。以前L児は、土をカップに入れてひっくり返してケーキをつくったことがあった。水の加え方やカップに入れる土の量などを変えながら、形が整うまで何度も試していた。また、ケーキの上に色とりどりの草花を乗せることを思い付くと、それぞれのケーキに全て違う種類の飾りを乗せるなど、興味をもった遊びに夢中になってとことん遊ぶ姿が印象的であった。

VI期は、自分のしたい遊びに新しい工夫を加えて繰り返し楽しんだり、困ったことから問題に気づき、解決に向けて感じたことや考えたことを試したりすることを大切にしている時期である。L児がこれまで好きな遊びに夢中になってとことん遊ぶ姿から、泡を使った遊びはその可能性があるのではないかと考えた。幼児の姿を肯定的に捉え、一人一人の遊びに共感することや、困ったことがあった時に自分で問題に気づき、願う遊びが思い切り試せるような環境構成や援助を大切にしようと、副担任と保育の方向性を確認した。

その後もしばらく、ハンドソープの泡を使う遊びや、5歳クラスから石けんを借りてきて「みどりちゃん」の銅像を洗う遊びが続いた。副担任と幼児の姿を共有し、これらの幼児の様子から、泡を使った遊びは幼児にとって興味深く、様々な遊び方を試すことにつながるだろうと考え、固形石けんを半分に切ってケースに入れ、いくつかのボウルと一緒にテラスに置いて環境構成を行った。

6月24日

テラスにあった石けんと、ボウルを見つけて手に取る。

L児：「Mちゃん、一緒にこれやろう」

M児：「いいよ、水入れてこようよ」

L児：「石けん入ると、だんだん水の色変わるね」

M児：「あわあわ、気持ちいい」

L児：「私、シャボン玉できるよ」

担任：「えっ、そうなの？ どうやってやるの？」

L児：「あのね、指でできるんだよ。こうやってやると…あ、できない。待って、もう一回」

担任：「へえ、指でシャボン玉できるなんておもしろいね」

L児：「あ、今もうちょっとでできそうだった」

担任：「本当だ、少しできそうだったね。惜しい」

M児：「それ、どうやってやるの？」

L児：「こうやって、ゆっくりやさしく開いて、ふうってやるとできるんだよ」

M児：「ええ、できない」

L児：「ここはくっつけて、そうっと開くんだよ。ほら、できそう」

M児：「やっぱりできないよ」

担任：「なかなか難しそうだね。どうすればできるんだろうね」

L児：「ストローがあれば、もっとできるんだけどなあ」

担任：「ストロー？ それがあるとできるの？」

L児：「そうだよ、前やったことあるからできるよ。ストローある？」

担任がストローを2人に1本ずつ渡すと、L児がストローの先端をボウルの中に入れて息を吹き込む。

L児：「見て見て、すごい。泡がいっぱいになった」

M児：「わあ、すごい。泡だ！」

担任：「わあ、こんなに泡がいっぱい。おもしろいね」

L児：「こんなにいっぱいになった！」

M児：「ここから出そう。泡、さわると気持ちいい！」

L児：「ほんとだ、ふわふわで気持ちいい！」

3歳クラス児が通りかかる。

3歳クラスa児：「わあ、これなあに？」

3歳クラスb児：「すごい、さわりたい！」

L児：「これねえ、私たちが石けんでつくったんだよ」

M児：「こうやってぶくぶくってやるとできたよ」

L児：「これ、さわってもいいよ」

L児は、この日初めてテラスに置いてある石けんを手にした。石けん水が少しずつ泡立ち始めると、L児は握った左手の親指と人差し指で円をつくるように指をそっと開き、石けんの膜ができたことを確認して、そこへ息を吹きかけた。シャボン玉をつくりたいようだったが、石けん液の濃度が低いためか、息を吹きかけると膜が揺れて割れてしまい、なかなかうまくできなかった。しかし、L児は慎重に指を動かし、何度も試していた。

指をゆっくり開いて息を吹きかけることを繰り返して試している姿、M児に対して実演しながら説明をする姿から、これまでの経験を生かして自分でシャボン玉をつくりたいというL児の熱意を感じ取った。担任は「惜しい」「どうしたらいいかな」等、L児に共感する声かけをしながら、L児がチャレンジする姿を見守った。しばらくすると、L児はストローが欲しいと言った。なかなかシャボン玉ができないのは「手でつくっているから」であり「ストローがあればシャボン玉はできる」とL児は考えたのではないかと捉えた。しかし担任は、ここですぐにストローを渡すことに迷いがあった。これまで、新しい道具を出す時は、その道具の必要性や使い方を幼児に問いかけ、どんな遊びのイメージなのかを読み取ってから提供するようにしてきた。この時のL児は、指の間に膜が張るところまではできている。繰り返し試していたら、ストローを使わずに、指でつくるシャボン玉ができたかもしれない。ストローを渡すのはこのタイミングがよいのかどうか迷ったが、L児の「こうすればできるのではないかと」という新たな視点と「やってみよう」という前向きな気持ちを大切にしたいと考え、L児とM児に一本ずつストローを渡した。

その日の副担任との振り返りでは、L児とM児がストローをボウルの中の石けん液の中に入れて息を吹き込み、どんどん出てくる泡に驚きながらも、夢中になって息を吹き込み続ける姿や、ストローを提供するタイミングについて話題となった。担任は、L児がストローを使いたかったのは、シャボン玉をつくるためだと思っていたため、ボウルの中でブクブクと泡をつくり始めたのは、予想外のことだった。しかし、出てきた泡を手に取り「さわっていいよ」と、興味深く見ていた3歳クラス児に笑顔で差し出す姿から、自分でたくさん泡をつくらせたことを、とても満足しているのだと読み取った。もしかしたら、L児も予想していなかった泡ができ、驚く気持ちもあったかもしれない。

ボウルの中の石けん液に息を吹き込み、泡をつくるという新たな遊びを思いついたL児の姿から、石けんを使った遊びはさらにL児の興味をひき、遊びの幅が広がるのではないかと考えた。そこで、繰り返し試すきっかけとなることを願って「みんなの時間」に読み聞かせを行った後、石けんとボウルの他にシャボン玉の本をテラスの机の上に置いておくことにした。

6月28日

たらいに石けん水をつくり、クッキー型を使ってシャボン玉をつくっている。

L児：「見て見て、大きいシャボン玉ができた」

J児：「すごい！私もできるよ。見て」

担任：「わあ、本当だ。大きなシャボン玉ができるようになったんだね」

L児：「うーん、でも私、本みたいなストローでフーって吹くシャボン玉が作りた  
いんだ」

J児：「あ！それ、つくりたい」

L児：「この本につくり方が書いてあるね」

担任：「何がいるんだろうね」

L児：「石けんと水かな。あと、ボウルが汚れてるから洗わないといけない」

J児：「洗いに行こう」

ボウルについている土をきれいに洗い、テラスの机に戻ってくる。

L児：「石けんは細かくなってる。スプーンでけずる？」

担任：「なるほどね、でもこんなスプーンあるかなあ？」

L児：「うーん、あったかなあ」

道具を探しに行く。

担任：「同じスプーンはなさそうだけど・・・」

L児は、近くにあるプリンカップを手取る。

Ｌ児：「うーん・・・あ、こうやったらできるかも」  
担任：「すごい、できてるよ。石けん、細かくなってるね」  
Ｌ児：「うん。これ、水の中に入れて混ぜるんだよ」  
担任：「なるほどね」  
夢中になって石けんを削り、細かくなった石けんの量が増える。  
Ｌ児：「そろそろ、ストローでやってみようかなあ」  
Ｊ児：「やってみたい！」  
Ｌ児：「あ！今できた！」  
担任：「本当だ、今結構大きかったよね？すごい」  
Ｌ児：「やったあ」

シャボン玉のつくり方が本に載っていたことを思い出したＬ児は、そのページを探した。その中で、固形石けんをスプーンで削る工程があるのだが、スプーンは近くに見当たらず、Ｌ児はどうしようかと考えている様子だった。担任がスプーンを取りに行くこともできたのだが、他の道具であっても削ることが可能であり、Ｌ児が自分なりに工夫して考えるきっかけとなるだろうと考え、担任はその様子を見守ることにした。そのうち、近くにあったプリンカップに目を向け、手に取った。そのふちを石けん押し当てて動かすと、小さな石けんの破片が一つ落ちた。プリンカップで石けんが細かくなることが分かったと、Ｌ児は夢中になって石けんを削った。細かくなった石けんは水によく溶け、Ｌ児はその石けん水でシャボン玉をつくることができ、とても満足そうな表情を浮かべていた。

この時、本につくり方が載っていたことを思い出し、写真を見ながら石けん液をつくろうとしたＬ児の姿に、担任は感心しながらも、この本を見て同じようにつくことは、Ｌ児が試行錯誤をする機会を減らしてしまうのではないかという迷いもあった。しかし、Ｌ児が「ストローでやってみたい」という思いをもっており、それに向けて自ら動き始めた姿を大切にしたいと思い、様子を見守ることにした。また、写真と同じ物ではなくても、身近な物を代用して使うＬ児に感心した。Ｌ児が根気よく石けんを削る姿と、その熱意に担任は心が動かされた。自分の石けん液を使ってシャボン玉をつくることができ、Ｌ児の自信につながったのだろうと捉えた。

この日の午後、Ｌ児は一人で黙々とテラスでシャボン玉づくりを続けた。何度も繰り返していると、息の強さを調節して、サイズの大きなシャボン玉ができるようになっていった。また、１つだけではなく複数のシャボン玉ができるようになっていき、Ｌ児自身が思い描くシャボン玉づくりに少しずつ近付いているのだろうと読み取った。初めにストローを渡した時、ボウルの中での泡づくりに夢中になっていたＬ児だったが、「ストローでシャボン玉をつくりたい」という強い思いがあったのだと感じた。泡づくりはいわゆる「遊びの寄り道」のようなものであったのかもしれないと捉えた。

副担任との振り返りでは、代用品で根気強く石けんを削るＬ児の姿、息の強さを工夫してだんだんシャボン玉がうまくできるようになってきたＬ児の姿が話題になった。「やりたい」という気持ちが、こんなにも遊びを発展させていくことに驚き、Ｌ児のシャボン玉づくりに対する思いを大切にしていけることを共有した。また、遊びの中での発見や感動が生まれるように、必要な道具の種類や数を副担任と見直し、精選した。仕切りのあるケースに半分に切った固形石けんを入れ、クッキー型を５つ、ボウルを３つ、ストローを５本程度、テラスの棚に用意した。新しい道具は少しずつ出し、初めて道具を使った時の感動を大切にしたいと考えた。代用品でよいものはあえて出さず、テラスの棚を整理して環境を整えた。

7月1日

Ｌ児とＪ児が、テラスでストローを使ってシャボン玉づくりをしている。  
Ｌ児：「見て見て。大きいシャボン玉できるよ」  
Ｊ児：「私もできるかなあ」  
Ｌ児：「遠くまで飛んだよ」  
担任：「すごいねえ。まだ飛んでるよ」  
Ｊ児：「本当だ」  
Ｌ児：「今度さ、料理で使うやつでシャボン玉つくってみたいな」  
担任：「どんなの？」  
Ｌ児：「本に載ってたやつ。これ」  
道具の入っているコンテナの所へ行き、フライ返しを探す。  
Ｌ児：「あった。やってみよう」  
担任：「できるかなあ」  
Ｌ児：「え？全然できない。もう一回・・・やっぱりできない」  
担任：「どうしてだろう？」  
Ｌ児：「うーん、できないなあ」



J児：「それ、やってみたい。うーん、できないなあ」

担任：「できないね」

L児：「うーん、なんでかなあ。全然できない」

J児：「できそうだけど・・・」

何度か繰り返した後、本に載っているフライ返しと見比べる。

L児：「でもさあ、本はここが星じゃなくて、線みたいになってるから、できないのかなあ」

担任：「あ、この穴の部分？穴が違うとできるのかなあ」

L児：「うん、多分線のやつならできるんじゃない？」

担任は保育室に保管してあるフライ返しを取りに行く。

担任：「これかなあ？」

L児：「これこれ！これならできるかも。やってみよう・・・あ、今できた」

担任：「わあ、本当だ。すごいね。もう一回見たいなあ」

L児：「ほら、こうやって振ったら・・・できた！」

担任：「あ、すごい！2つもできてたよ」

L児：「やったあ」

J児：「すごい！」

フライ返しでシャボン玉をつくりたいという思いをもったL児は、フライ返しの穴の開いている部分に膜ができていないかを確認して振ってみるが、何度試しても液が垂れるだけでシャボン玉はなかなかできなかった。しばらくして、L児はフライ返しを見つめていた。L児の持っているフライ返しは、1センチ程度の星型の穴が3つあるものだったが、本に載っているフライ返しは柵のように空間があるものであった。そのことに気付いたL児は、シャボン玉ができない原因は、穴の違いによるものだと考えているのではないかと捉えた。同じフライ返しであるが、L児が細かい所までよく見ていたことに担任は驚いた。そして、違う形のフライ返しを使って、すぐにでもシャボン玉づくりをやってみたいという気持ちがあふれている様子であった。

担任は、シャボン玉ができなくても諦めずに何度も試し「フライ返しの穴に原因がある」と自ら原因を追究しようとしているL児の姿に心が動かされた。このシャボン玉づくりに夢中になっているL児の楽しみがもっと続いてほしいと願い、保育室に保管していた柵のように空間のあるフライ返しをL児に渡すことにした。L児は受け取ったフライ返しを石けん液に付けて、左右に大きく振ってみると、数個のシャボン玉ができた。L児の表情がぱっと明るくなり、フライ返しを使ったシャボン玉づくりに繰り返し挑戦していた。2つ以上がくっついたものや、大きなサイズのものなど、様々な種類のシャボン玉ができた。新しい形ができるたびに声を上げて喜ぶL児の姿を見て、このタイミングでフライ返しを渡してよかったのではないかと感じた。

この後、約2週間石けんを使った遊びは続き、興味をもって一緒に石けん遊びをする幼児が増えた。L児は、両手で大きなシャボン玉をつくったり、友達と一緒に大きなたらいを使ってたくさんの泡をつくったり、できた泡を皿やカップに入れて料理に使ったりしていた。また、L児は何度も石けん液づくりを行う中で、「水が多いとだめだよ」と友達に教える姿もあった。自ら編み出した石けんの削り方のコツを覚え、水に溶かす石けんの量が増えるほど、濃度が高くなってシャボン玉が作りやすくなる経験が、このように友達にアドバイスできるほどになったのだと捉えた。副担任との振り返りでは、毎日更新される石けんの遊び方を話題にした。これからどんな「やりたい」が出てくるのかが楽しみであり、やりたい遊びを思い切り試すことができるようにしていきたい。そのために、まずは幼児の気持ちを肯定的に受け止め、必要な道具がある時は相談したり、幼児の育ちをよく考えてから提供するなどの援助をしようという方向性を確認した。

7月16日

L児：「先生、段ボールください」

担任：「段ボール？何に使うの？」

L児：「段ボール使って、シャボン玉ができるんだよ」

担任：「え？シャボン玉ができるの？」

L児：「そう」

担任：「そうなの？段ボールで？Lちゃん、やったことある？」

L児：「やったことはないけど、できるんだよ」

担任：「段ボールは、どのくらいの大きさ？」

L児：「うーん、このくらいかな」

保育室にダンボールを探しに行く。

担任：「こんな段ボールあったけど、どう？」

L児：「いいね、でも、これだと大きいから、切らなきゃいけない」

担任：「こんなものがあるけど、どうかなあ？」

L児：「それなら切れそう」

段ボールカッターを使って、縦10センチ、横20センチ程の大きさに切る。

L児：段ボールは穴が開いてるから。ここに石けん付けて、吹くの。ほら、できた！」

担任：「わあ、びっくりした。いっぱいできるんだね」

L児：「やったあ」

M児：「すごい、それやってみたい。どうやってやるの？」

L児：「あそこにある段ボールをこのくらいに切って、こういうのをつくるとできるよ」

M児：「やりたーい」

この日は朝の支度が終わるとすぐに、L児からシャボン玉づくりに使うための段ボールが欲しいという要望があった。これまで、段ボールを使ったシャボン玉遊びは見たことがない。しかし、L児はフライ返しなどでシャボン玉をつくった経験から、穴があればシャボン玉ができるのではないかと気付いたのだと捉えた。あまりに突然のことだったので担任は驚き、L児がどんなイメージをもっているかを確かめたいと考え、必要な段ボールの大きさやシャボン玉の作り方を尋ねた。L児はそれがしっかりとイメージできているようだった。これまでの遊びを発展させた新たな遊びを「やってみたい」という、L児の気持ちが高まっていると読み取った担任は、すぐにL児と一緒に段ボールを探しに行った。

L児が段ボールカッターを使うのは初めてだったが、担任と使い方を確認しながら少しずつ切り進めた。まっすぐに切ることは難しく時間がかかり、途中で斜めになってしまったが、最初から最後まで自分で切ったL児は達成感があつたようだ。L児は、切り取ったダンボールに、すぐ石けん液に付けた。空気の通り道ができるように、石けん液を付ける場所を考えていることに驚いた。一方から息を吹き込むと、いくつものシャボン玉ができ、ふわふわと飛んでいった。これまでにないくらい、たくさんのシャボン玉ができており、うれしそうなL児の笑顔が印象的だった。L児が何度も繰り返してシャボン玉をつくる様子を見て、M児も興味をもった。L児が得意になってダンボールの切り方を説明する様子から、自分のイメージ通りにシャボン玉づくりができたことに自信をもち、夢中になれる遊びの一つになったのだろうと感じた。

この後、何人もの幼児が段ボールのシャボン玉づくりに挑戦した。段ボールが思い通りの大きさにならなくて、やり直すこともあつたが、自分でつくった用具は愛着があるようで、シャボン玉づくりに夢中になっていた。副担任とは、L児の「やってみたい」という思いを支えることで、L児の遊びの幅が広がり、周りの幼児も興味をもって一緒に遊ぶようになった姿から、この時に段ボールを提供してよかったのだと振り返った。それと同時に、幼児が欲しいという道具を、いつどのように提供するかは、保育中に相談することも大切だと感じた。幼児が「これがやりたい」という気持ちをいつでも伝えられるように教師が聞く姿勢を忘れないようにすること、その「やりたいこと」への実現に向けて、教師が思いをしっかり受け止めて共感し、同じ目線に立って援助を考えていくことが大切だと感じている。

## 考察

石けんとボウルだけ用意をしたところから始まった遊びが、泡づくりに変わったり、様々な道具を使ったシャボン玉遊びに発展したりした。「やりたい」という気持ちを大切にしながら、担任は、その時の幼児の思いに合わせて道具を出すことや、「自分でできた」という達成感が得られるように、一緒に考える姿勢を大切にしながら見守りながら援助することを意識した。石けん液をつくる時にスプーンが見当たらなかった時は他の物で代用したり、フライ返しを使っても思ったようにできなかった時はその原因を探ったりして、L児は自分で工夫をしたり解決に向けて考えたりしていた。また、石けん液をつくる時の「水の量と濃度の関係」や、シャボン玉をつくるための「ちょうどよい息の強さ」が分かるようになったのは、繰り返し試したことによるものである。そしてL児は、繰り返し試して遊びに没頭することにより、友達とのかかわりが少しずつ広がっていった。一人一人が好きな遊びは何であるかを教師が読み取り、遊びに没頭する姿を支えていくことが大切であると考えた。

遊びの中で、本来の思いであつたはずの遊びから離れ、異なる遊びに夢中になる、いわゆる「遊びの寄り道」は、よくあることではないかと思う。教師が効率のよい方法やうまくいく方法を教えることは簡単であり、つい声をかけたくなってしまうことも多々ある。しかし、その寄り道が思わぬ遊びのヒントとなることもあるため、無理に止めたり引き戻したりするのではなく、幼児が「やりたい」と思う気持ちを大切にしていきたい。今回、L児本人が「シャボン玉をつくりたい」という思いをもって繰り返し試したことは、L児の自信や喜び、達成感につながっている。教師は主役である幼児の思いに共感し、繰り返し試す様子を見守りつつ「自分でできた」という喜びが得られるように、環境構成をしていくことが必要だと感じた。

## <4歳クラス VII期 9~12月> 自信をもってかかわり、遊ぶ姿を支える

### これまでの保育の様子

10月下旬頃までは外遊びが中心であり、土に水を加えてこねた粘土で型抜きをして皿に盛り付けたり、友達と一緒に声を掛け合って砂場で水路をつくったりしていた。また、園庭を隅々まで歩き回ってカナヘビやカマキリなどの生き物を捕まえて世話をしたり、栗拾いをしてみんなで試食をしたり、どんぐりを削って粉にしたりするなど、季節の変化に応じた遊びをしていた。

N児は遊び始める時「一緒に行こうよ」と言って保育者を誘うことが多い。朝の登園時に母親と分かれることを時々渋り、何をしようか迷っているときは、保育者のそばに来て過ごしていることもあった。しかし、遊びを近くで見守っていると、できたものを見せたり、自分が疑問に思ったことを保育者に話したりして、安心して過ごせるようになってきた。保育者と一緒に出掛けることを楽しみにしており、大きな葉を見つけて喜んだり、カマキリを捕まえたりした。また、小さなカラスノエンドウをたくさん採って来てままごとに使ったり、丈の長い草を採って土山に差してネギに見立てたりするなど、豊かな発想で遊びを楽しんでいた。

VII期は「友達とのかかわりを深める時期」である。保育者と一緒にいることで、安心して遊ぶN児の気持ちを大切にしつつ、N児の目の付け所のよさや、楽しみの見つけ方を周りの友達に伝えることができれば、N児の自信にもつながり、全体の遊びの幅が広がることにもつながるだろうと考えた。N児に寄り添って遊びの楽しさを共有し、その中で少しずつ周りの友達とのかかわりが増えることを願った。

9月17日

ヨウシュヤマゴボウの実を1人で採りに行き、色水をつくるN児

N児：「これでジュースができるんだよ」

担任：「どうやってつくるの？」

N児：「これでつぶすんだよ」

担任：「色が出てきたね」

N児：「すごい色だー！」

N児：「泡がつくりたいんだよなー」

担任：「泡をつくってどうするの？」

N児：「この色水入れたら紫の泡になるんだよ」

担任：「そうなんだ」

N児：「石けんはあるんだけど…どうやってつくるのかなあ」

担任：「泡かあ…うーん、どうやってつくるんだろうねえ」

N児：「うーん、分かんないなあ」

しばらく石けんを色水の中に入れて混ぜる。

N児：「できないなあ」

担任：「Oちゃん、知ってるかなあ。聞いてみたら？」

N児：「えー、先生言ってよー」

担任：「N君聞いてみたら、教えてくれるんじゃない？」

N児：「えー、聞いてー」

担任：「Oちゃん」

O児：「どうしたの？」

担任：「N君、困ってるみたいなんだよね。どうしたいんだっけ？」

N児：「泡づくりたいんだけど、できないの」

O児：「つくってあげる？」

N児：「うん、つくってー」

担任：「よかったね。」

担任：「Oちゃん、泡づくり上手だね」

N児：「見て、混ぜたらきれいな色になった」

担任：「きれいだねえ」

N児：「ジュースの上に泡が乗った」

担任：「わあ、おいしそう！」

ヨウシュヤマゴボウの実を採って、色水遊びをしようと、N児はこの日1人で実を探しに行った。採りやすいところについていたものは、すでに採られており、N児は葉をかき分けて数粒の実が付いている房を採ることができた。実を一粒ずつ採って小さなカップに入れ、すりこぎですりつぶしていた。水を加えると、美

しい紫色の色水ができた。N児はこの色水をふわふわの泡に混ぜたいという思いがあったようで、石けんを持って来たのだが、泡のつくり方がよく分からず戸惑っていた。担任が「誰か知っている人いるかな…」と声を出すと、近くにいたO児が様子を尋ね、石けんをおろし金で削って色水の中に入れ、泡だて器をぐるぐる回してふわふわの泡をつかった。

石けんを使うと泡ができることは、これまで友達の様子を見て知っていたN児だったが、実際にふわふわの泡を自分でつくった経験はなかった。担任がそのつくり方を示すことも頭をよぎったが、自分で挑戦したり友達に聞いたりするかもしれないと思い、しばらく様子をみていた。しかしN児は「できないなあ」と何度かつぶやき、ボウルの中に入れた石けんを手で混ぜていた。担任は、泡づくりが得意で、これまでも何度も経験があるO児が近くにいることをN児に伝えた。しかし、N児はO児につくり方を聞くのではなく、担任に聞いてほしいと要望した。

石けんを水の入ったボウルを持っているものの、その後どうすればよいのか分からず、自信がなかったため、O児に聞くことができなかつたのかもしれない。もしくは「泡をつくりたい」という思いが、十分に高まっていなかつたのかもしれない。この時、泡をつくってどうしたいのか、何をして遊びたいのか等と問いかけ、N児の気持ちを十分に受け止めることができれば、自らO児に聞くきっかけとなつたかもしれない。担任は、遊びの中で「できた」という体験が、N児にとっての自信につながるであろうと考え、担任からO児に声をかけ、N児と話すきっかけをつかった。N児は、O児のつくった泡と色水をグラスに注いで、ジュースをつくったり、紙の上のせて筆で絵を描いたりする遊びに発展した。

N児は自分からO児に声をかけることはしなかつたが、困っていることを担任に話し、少しのきっかけがあれば、N児のしたいことがどんどん広がっていくことが副担任との振り返りで話題となった。また、保育者が見守りながらN児の思い高めることが、周りの友達とのかかわりを自ら求め、育ちにつながっていくのではないかと考えた。

11月上旬から中旬にかけて、室内での遊びを充実させようと、副担任と相談して環境構成を徐々に行った。保育室では空き箱や段ボール、ペットボトルキャップなどの廃材、スズランテープ、ガムテープ、ペンなどを自由に使えるように用意した。それらを使った制作活動が楽しめるように、テーブルを保育室の真ん中に設置した。また、保育室の角はままごとコーナーとしてコンロや鍋、食器などを設置した。遊戯室では、大型積み木やフラフープ、大縄などで自由に遊べるようになり、幼児は屋外へ出る時間より、徐々に各保育室と遊戯室の行き来をする時間が多くなり、廃材で好きなものをつくったり、大縄にチャレンジしたりするようになった。N児は、朝の支度が終わると担任や副担任のそばに来て、もたれかかるような仕草をすることがよくあり、何をしようかと戸惑っている様子があった。それでも、周りの友達の様子を見て、様々な廃材の中から好きな材料を選び、製作をするようになってきた。

11月25日

副担任：「えっ、この釣り竿N君がつくったの？」

N児：「うん、そうだよ」

副担任：「そうなの？この糸は？糸なんてなかったのに、どうしたの？」

N児：「ここの、ガムテープの所から出たやつ使ったの」

副担任：「ええ！すごい、びっくりした。あれ？この棒は？」

N児：「これも、ガムテープでつくったんだよ」

副担任：「棒、なかったのに自分でつくったの？すごい、天才！どうやって遊ぶの？」

N児：「ここに餌付けて、魚釣るの」

副担任：「わあ、すごい。よく考えたね、」

O児：「それなあに？」

N児：「魚釣り」

O児：「どうやってやるの？」

N児：「こうやって、釣るの」

O児：「すごい、やってみたい」

P児：「なにそれ？」

N児：「魚釣り」

P児：「やらせて、やらせて」

N児：「いいよ」

この日、N児は廃材を使って釣りの道具をつくらせていた。釣り糸の部分をつくり始めたのだが、保育室には糸は置いていない。代用できるものが見つければよいと考えていたが、まさかガムテープから出ている細い繊維を見つけるとは思いもよらなかつた。副担任は、自分が試行錯誤しながら釣り竿をつくり出した姿に心を動かされ、その感動をN児に伝えた。その「糸」を発見したことで魚釣り遊びの用具が揃い、N児は得意になって魚を釣る様子を披露した。すると、周りにいた幼児がその様子を見て興味をもち、釣竿を持って魚

釣り遊びをしていた。5歳児も数名一緒に遊んでおり、N児はその姿を見てとても満足そうな表情を浮かべていた。

この日の振り返りでは、ガムテープから出た糸を使おうという発想、それを使うことによってうまく釣り竿をつくった感動を、副担任がN児と共有したことが、N児の自信につながったのではないかと話し合った。N児が自信をもつためには、教師は時に、一人の遊びの仲間としてかかわるスタンスも大切であると考えた。だからこそ、同じクラスの友達だけではなく、クラスの枠を超えてN児の周りに幼児が集まって釣りで遊び始めた時、よい表情でかかわっており、その姿をうれしく感じた。

この日は魚釣り遊びの用具を全て持ち帰り、家族にもその遊び方を披露したことを母親から聞いた。翌日、魚釣りの用具を登園の時に持って来て、担任に遊び方を見せた。魚の種類が増え、糸の先に付けるための予備のガムテープも増えており、まとめて持ち運びができるように、片付け方まで考えられていたことに驚いた。また、折り紙でつくった魚には、何度も遊ぶことができるように表も裏もテープが貼ってあった。その考えに感心し、自ら工夫してつくるN児の思いを大切にしていきたいと考えた。そして、N児が自信を高めることで、自然と他の人にも見せたいという思いが生まれてくるのではないかと考えた。そこで、副担任と相談して、新聞紙を遊びに用いることにした。新聞紙は、簡単に形を変えることができ、幼児自身が感じたことを自由に表現することができる。また、イメージ通りの製作も可能であり、何かに見立てて遊ぶことができるため、遊びの幅が広がって創造性を育むことができる。

そこで「みんなの時間」に新聞紙を使う機会を設定した。季節の製作として、新聞紙とカラーガムテープを使ったクリスマスリースをつくり、翌日は来年の干支であるヘビをつかった。ガムテープを使うことで、新聞紙を思い通りの形に整え、カラフルに仕上げるができるよさがある。幼児は、楽しみながら自分の思い思いの製作物をつくっていた。

12月11日

N児：「今日は忙しいんだ」  
担任：「どうしたの」  
N児：「頼まれたやつをつくらなくちゃいけないからさあ」  
担任：「何を頼まれたの？」  
N児：「Q君。ピクミンつくってって注文があるから」  
担任：「そうなんだ、注文があったんだね。昨日つくったやつ、かわいかったね」  
1人で集中して注文があったマスコットをつくる。  
担任：「Q君、何つくってるの？」  
Q児：「ご飯入れるところ。」  
担任：「誰のご飯？」  
Q児：「このピクミン。N君につくってもらったの」  
担任：「そうなんだ。かわいいねえ。Q君、注文したの？」  
Q児：「そう」  
担任：「そうか、Q君よかったね」  
Q児：「そう、だからご飯がいるでしょ？この中に入れて、蓋も付けるの」  
担任：「いいアイデアだね。N君、Q君がピクミンのご飯つくってるんだって。」  
N児：「うん」

新聞紙とガムテープを使ったマスコットづくりは続いていた。初めはボールのような形だけだったものが、他の色のガムテープを使って目や鼻を付けたり、耳を付けたりするようになり、次は体をつくるようになっていた。体には手足や羽が付き、頭部の形も丸ではなくて、先がとがったような形をつくるようになり、少しずつ形が難しくなっていた。両手で抱えるほどの大きさのマスコットをつくっていた。それを見ていたQ児はN児にマスコットをつくってもらうことをお願いしていた。

この日の登園の受け入れの際、母親からN児が園に早く行きたいと言っていたことを聞いた。Q児からマスコットづくりを頼まれたことを家で話していた。期待に応えたいという気持ちが表れている様子だった。自分の好きなことが友達に認められたことが、喜びにつながったのだと感じた。朝の支度を終わると、すぐにマスコットづくりに取り組むN児の姿があった。

マスコットが完成してQ児に渡すと、Q児は待っていましたと言わんばかりの様子で、N児から受け取った。そして、次にQ児が始めたことは、そのマスコットのご飯づくりであった。マスコットと同じ色のガムテープを廃材に貼り、ガムテープでつくったご飯を入れ、蓋を付けた。その隣でじっと様子を見ているN児。多くの言葉を交わしているわけではないが、Q児がマスコットを大切にしていることは、ご飯をつくる様子から伝わったのではないかと思う。N児は、Q児の隣でまた新たなマスコットづくりに夢中になった。自分の得意なことをとことん突き詰め、友達からも頼られるようになったN児は自信に満ち溢れていた。

この日の振り返りでは、これまであまりかかわりのなかったQ児とのやりとりが話題となった。N児のつ

くっているマスコットが魅力的であることに気付いたQ児。なんとといっても、N児が夢中になって楽しい雰囲気でもマスコットづくりをしていたからこそ、Q児の依頼へとつながったのだろう。そしてN児にお願いしたことで2人の関係がぐっと近くなったようだった。かかわりは、遊びの時間だけではなく、暮らし全体で捉えていくことが大切だと感じた。毎日、N児はマスコットづくりをするようになり、作品も増えてきた。そしてこの頃から、N児がつくっているように新聞紙とカラーガムテープを使って、マスコットをつくる子どもたちが増えてきた。そこで、ガムテープの色を何色か用意し、新聞紙やポリ袋、空き箱、トイレットペーパーの芯などをすぐ手に取ることができる場所に置いて環境を整えた。

12月18日

R児：「今日はN君とS君と遊ぶんだー」  
担任：「なんだか楽しそうだね、何するの？」  
R児：「一緒にこの子（マスコット）の家つくるの。N君、S君一緒にやろうよー」  
N児：「いいよー」  
S児：「最初何から始める？」  
R児：「じゃあさあ、これ（新聞紙）が家ってことね」  
N児：「ここはどうする？」  
R児：「えー、どうする？お風呂とかかなあ」  
S児：「あと、ここにベッドつくったら？」  
R児：「いいねー、じゃあ私ベッドつくろう」  
N児：「いいよー」  
R児：「こうやって寝るのはどう？」  
N児：「いいね」

R児は、N児のマスコットづくりを真似して、自分でマスコットをつくる遊びをするようになっていた。自分でつくったマスコットを大切に、担任にもよく見せてくれた。この日の前日、N児が新聞紙を広げてその上に空き箱などを置いて、家をイメージするような遊びを始めた。その様子を見たR児が、マスコットを持って、その家の中でマスコットを動かしながら一緒に遊ぶようになった。このように、マスコットを使って共通したイメージをもって遊ぶことは、これまで見られなかった。その遊びが楽しかったようで、この日は朝からR児が張り切っていた。S児を含めた3人で新聞紙を広げ、空き箱を組み合わせる風呂やベッドなどをつくり、それらをガムテープで新聞紙に貼り付けて「家」をつくっていた。

振り返りタイムでは、N児にとって「かかわり」とは何かについて話題になった。遊びはR児が中心となって声をかけていたが、S児とN児もそのイメージを共有して一緒に家具をつくり、マスコットをその場で動かしながら3人が同じ空間で遊んでいた。互いにつくっているものを確認したり、友達がつくったものを使ったりして遊んでおり、3人での会話は決して多くはないが、かかわっている姿であると捉えた。遊びに夢中になれるような援助や環境構成を続けてきたことで、N児は自分の遊びに自信をもつことができ、それがかかわりにつながったのだと考えた。

## 考察

保育者の近くにおいて遊ぶことが多かったN児が、自分のしたい遊びを見つけて夢中になって遊び、その遊びを通して周りの友達からも頼られるようになったことは、大きな成長だと感じた。「早く幼稚園に行きたい」という言葉にN児が遊びに夢中になり、自信をもっている姿が表れているのではないだろうか。自信をもつことが、友達にも見てほしい、友達と一緒にやってみたいという思いにつながり、自然とかかわりが生まれてくるのではないかと考えた。

また「かかわる」とはどういうことなのか、自分自身の捉えも広がった。N児のように言葉は交わしてなくても、ものを通してかかわること、自分のつくったもので友達が楽しく遊んでいる場面をみることも、N児にとっては育ちというべき「かかわり」なのではないだろうか。

N児の発想やアイデアは、担任や副担任の思いを超えることが多く、作品ができると担任や副担任に披露していた。その都度、担任や副担任は、作品の出来栄だけではなく、つくり方や遊び方、工夫したところなど尋ねながら発見や感動を共にした。幼児の発見や感動を共有することで、教師も楽しくなる。その楽しい雰囲気は、周りの幼児たちにも伝わり、遊びの様子を見て興味をもったり、一緒にやってみようとしたりするきっかけとなったのだと思う。教師が幼児同士のかかわりをつなぐことは時に大切であるが、教師が幼児と共に心を動かすようなスタンスでいることによって、子どもたちのかかわりたいという思いを高めていくことが大切なのではないだろうか。

## <4歳クラス Ⅷ期 1～3月> 幼児のしたい遊びから自信につなげる援助

### これまでの保育の様子

1月になり、気温が下がったので、子どもたちの遊びの場が、屋外から室内に移行してきた。そのため、保育室はロッカーの位置を替え、製作の際に使う道具類が手に取りやすいようにしたり、製作したものをみんなが鑑賞できるように、窓際に作品を置くスペースを設けたりして環境を整えた。また、段ボールや空き箱などの廃材の他、かるたやこま、あやとり、折り紙などを自由に使えるようにした。遊戯室では一輪車や大縄、大型積木などで遊ぶ幼児が多くいた。

そのような環境の中で、T児は、友達の様子の様子を見ながらついていき、自然と一緒にその場に入って遊ぶ姿が見られた。しかし、突然「ママがいい」と言って、しくしくと泣き出すことがあった。そこで担任は、T児と会話をしながら、好きな遊びを一緒に探すことにした。遊戯室では、5歳クラス児たちが段ボールでつくった「自動販売機」で遊んでいた。5歳クラスa児は、ボタンを押すと、好きな飲み物が出てくるところをT児に見せてくれた。T児はじっとその様子を見て、つくり方や仕組みをその場で覚え、家へ帰ってからすぐにつくった。次の日の朝、T児がつくった自動販売機を母親と一緒に持って来て、担任に見せた。担任は、他の友達にも見せようと声をかけたが「先生だけでいい」と、T児は断った。自動販売機は丁寧につくっており、5歳クラス児がつくったものをそのまま再現していたことに担任は驚いた。Ⅷ期に入ってから、友達が廃材やカラーテープを使ってつくった鉄砲を真似してつくり、自動販売機の時と同じように、母親と一緒に担任にそっと見せてくれたことがあった。

この姿を見たとき、T児が、遊びに夢中になり、自信がついてくると、友達にも見せたいという思いが生まれてくるのではないかと考えた。Ⅷ期は「友達とのかかわりを深める時期」である。T児が、好きなことや得意なことに自信をもつことで、T児のよさを友達同士で認め合うことを願い、援助をしたり、環境を整えたりしていこうと、副担任と共有した。

1月28日

担任：「わあ、すごいね。折り方覚えてるの？」

T児：「うん」

U児：「何してるの？」

T児：「紙飛行機つくってる」

U児：「私もやりたい。先生T君のと同じ紙くーださい」

折り紙を始める。

U児：「えー、最初ってどうやって折るの」

T児：「最初は、ここ折って」

U児：「次は？」

T児：「今度、ここ折って」

U児：「できた。飛ばしに行こうよ」

T児：「うん」

U児：「せえの、で飛ばそうよ」

T児：「いいよ、せえの…」

担任：「すごい、T君のよく飛ぶね」

U児：「私ももっと飛ばないかなあ」

担任：「どうすればいいのかなあ」

T児：「うーん、ここを折る？」

U児：「やってみよう」

T児：「うん」

U児：「あ、すごい。さっきより飛んだかも」

担任：「本当だ、さすがT君」

T児：「先生、これ付けたー」

担任：「紙テープ付けたんだ。こんな飛行機初めて見たよ」

U児：「すごい。じゃあさ、この中（フラフープ）に入れる？」

T児：「いいよ」

この日は、T児が担任に飛行機を折るために紙が欲しいと要望した。折り紙ではなく、長方形の紙が欲しいとのことだったので、A4のコピー用紙を渡した。T児は、家で何度もつくっているようで、慣れた手つきで紙飛行機を折り進め、すぐに完成させた。その様子を見て、U児が興味をもち、T児に折り方を聞いて紙飛行機をつくった。

T児は、紙飛行機を1人でつくっていたのだが、担任は、T児がどんどん折り進めていく速さや、紙の端ま

で丁寧に折っている様子に驚いていた。きっと、この紙飛行機はこれまでに何度もつくっており、自信をもっているのだろうと読み取った。飛行機が完成する頃、U児がT児の姿を見て一緒に飛行機をつくることになった。U児は、紙飛行機をつくった経験があまりなかったようで、その折り方をT児に聞いた。T児は、初め1人で紙飛行機をつくろうとしていたのだろうが、U児につくり方を尋ねられると、その工程を1つずつ見せながら、丁寧に教えていた。その姿は、まさに自信にあふれている姿であると読み取った。U児は完成した紙飛行機に名前を書いており、大切にしたいという気持ちが読み取れた。紙飛行機が完成して、2人で遊戯室に行き何度か飛ばしてみたが、U児の紙飛行機はなかなか遠くまで飛ばなかったため、T児は、U児の紙飛行機の先端の部分を折ってみるとよいことを提案した。少し先端を折ってみると、初めの時よりも少し遠くまで飛ぶようになり、U児もうれしそうな表情を浮かべた。また、T児が自分の紙飛行機の後ろ側に紙テープをいくつか付けて、飛ばしている姿からは、さらに工夫して楽しく遊びたいという気持ちがあると読み取った。また、U児はフラフープを持って来て、その中に紙飛行機を通そうという遊びを思いついた。

T児だけで紙飛行機をつくっていたのであれば、きっとこのような遊びは思い浮かばなかっただろう。T児は、U児に紙飛行機をつくり方を教え、うまく飛ばなかった原因を考えて紙飛行機の調整をしたことで、きっと自信をもったのだと考える。また、T児の保護者から、家でも折り紙遊びを楽しみ、新しい作品を次々につくっていることを聞いた。副担任との振り返りでは、T児がいきいきと紙飛行機遊びを楽しんでいる姿について話題となった。この日のように、T児が遊びに夢中になれるような環境を整えることが、T児の自信を高め、友達と生き生きとかわる姿につながるのではないかと考えた。そこで、A4サイズのコピー用紙の他、折り紙を何色か用意し、すぐに折ることができるように、低いテーブルを保育室に置いて、環境を整えた。

1月31日

折り紙を2枚組み合わせ、こまをつくるT児

担任：「何つくってるの？」

T児：「こま」

担任：「それ、こまなの？回るの？」

T児：「うん、こうやって…」

担任：「本当だ、回ってる。すごい」

V児：「何？それ。私もほしい」

W児：「え、何それ、何それ。ぼくもつくってほしい」

担任：「本当、すごいよね。T君がつくり方を知ってるみたいですよ」

V児：「私つくりたい。どうやってやるの？」

W児：「ぼくもやりたい。いい？」

T児：「いいよ」

V児：「最初、どうするの？」

T児：「じゃあ、好きな色を2枚取って」

W児：「2枚？これとこれでもいい？」

T児：「いいよ」

V児：「私、これにする」

X児：「なに？それ、すごい」

V児：「今ねえ、T君が教えてくれてるの」

X児：「いいなー、それほしい」

T児：「やる？」

X児：「うん」

T児：「じゃあ、2枚取って」

V児：「それで、どうやって折るの？」

T児：「こうやって折って」

X児：「え、分かんない」

T児：「最初、折る？」

X児：「うん」

この日、折り紙コーナーではT児が折り紙を2枚使った「こま」をつくっていた。1枚目と2枚目で異なる折り方をしたものを、慣れた手つきで組み合わせたこまは、片手で回すとくるくるとよく回った。それを見たV児、W児が興味をもち、こまがほしいと言った。

T児がその2人の分をつくって渡すことは簡単かもしれない。しかし、T児がつくり方を教えることで、T児にとってはかわりの中で遊ぶことにつながり、つくり方を教えてもらう2人にとっては、自分でつくった喜びにつながると考え「T児がつくり方を知っている」ことを伝えた。T児は、2人に折り紙を2枚選ぶ



ように伝え、折り方を説明していると、X児がそのこまに興味をもった。その後も1人増え、みんなに折り方を順番に教えていた。それぞれのペースが異なるので、T児は1人ずつの進み具合を見ながら次の折り方を教え、分からないところは、代わりに折ってあげるなど、忙しそうにしていたのだが、穏やかに教えていた。きっと、自分しかできない折り方をたくさんの方々に教えている背景には、遊びに夢中になることで自信を高め、友達にも教えたいという思いが生まれたのだろうと読み取った。

この日から、T児は毎日のように折り紙コーナーで遊ぶようになった。初めは1人で折っていても、T児の作品を見て、つくってほしいという友達が集まってきた。T児は、こまだけではなく、鶴や飛行機、3枚の折り紙を組み合わせる立体などをつくっており、その都度「どうやってやるの」と周りに友達が集まってきて、折り紙教室のようになった。普段、T児はあまり口数が多い方ではないのだが、折り方を教えている時は、声のボリュームが大きくなり、表情から自信に満ち溢れていると感じた。折り紙の作品がつかれると、幼児たち友達や職員のとこへ「見て見て。T君に教えてもらった」と嬉しそうに作品を持って見せに来る姿から、周りの幼児たちも、T児は折り紙が得意であると感じていたようである。折り方が分からず、担任のところへ聞きに来ることがあるが「誰か知ってる人いるかなあ」と返すと「あ、T君に聞けばいいんだ」と、すぐにT児の名前が挙がるようになった。

副担任との振り返りでは、折り紙で新しい作品をつくって披露するT児の遊びの幅の広げ方について話題となった。同じサイズの折り紙だけではなく、サイズの異なる折り紙を出してみると、さらにT児が遊びに夢中になり、自信を高める姿が生まれるのではないかと考えた。そこで、これまで使っている大きさの4分の1のサイズの折り紙、そしてさらに小さいサイズの折り紙、これまでよりもさらに大きいサイズの折り紙を使えるように環境を整えた。

2月5日

Y児：「先生、これ見て！」  
担任：「なに、なに？」  
Y児：「これ、すごくない？T君がつくったんだよ」  
担任：「こんなに小さいやつ？どうやってつくったの？」  
Y児：「ねー、すごいよね」  
T児：「ぼく、その折り方教えるよ」  
V児：「私も小さいやつで折りたい」  
担任：「どうやったらそんなに小さな折り紙でできるの？」  
T児：「えー？普通に折ったらできるよ」  
Y児：「私もこれからやるんだ」  
折り紙を始める。  
Y児：「これって、ここからどうするの？」  
T児：「これ、今までとおんなじだから…ここに入れて」  
Y児：「え？ここ？」  
T児：「うん」  
Y児：「えー、小さくて難しい」  
担任：「ほんと、小さいね。できそう？」  
T児：「できるよ！」  
Y児：「すごーい、できてる」  
V児：「本当だ、すごい。かわいい」

T児は、小さい折り紙を使っての作品づくりに夢中になり、これまでと同じように、こまや鶴などを、つくっており、T児と同じように周りの幼児たちも小さい折り紙を使った作品づくりをするようになっていた。しかし、やはり大きさが変わると、なかなかうまく折れなくなるため、途中であきらめてしまう幼児もいた。その中で、T児の手の器用さは一段と素晴らしく、どの作品を見ても、驚くばかりであった。紙が小さいから、簡単な作品にするのではなく、折り紙を2枚組み合わせたこまや、3枚組み合わせた立体作品も仕上げていた。T児の作品を見て、Y児は担任にその素晴らしさを伝えた。T児は、Y児が担任に作品を紹介しているやりとりを、にこにこしながら見ており、担任にもその作品の1つを手の平に載せて、そっと見せた。その語、小さい折り紙での折り方を教えるとY児に話した。自ら教えたいというT児は、得意げな表情をしており、すぐに折り紙のある場へ戻って折り始めた。途中で、折り方が難しいと感じられる場面でも「できるよ！」ときっぱりと話すT児からは、今までには見られなかった力強さが感じられた。

これほどまで折り紙遊びに夢中になっているT児は、まさに自信を高めていると感じた。以前のように、友達の遊ぶ様子を見て追うのではなく、自分のしたいことを十分に楽しんでおり、友達にも自信をもって教えている。保育室のみんなの目の届く場所に机と折り紙を毎日用意したことで、折り紙を折っているT児の姿が、多くの幼児の目にふれる機会ができたのだと思う。

副担任との振り返りでは、T児の自信は言葉だけでは読み取れないのではないかということが話題になった。遊びに夢中になっている時の表情、作品をそっと持って来る姿などから、T児が自信をもっているだろうことが読み取れた。

この頃、お楽しみ発表会で何をしたいかをクラスの幼児に尋ねた。大縄、一輪車、ダンス、マジックなど、幼児たちがそれぞれ好きな遊びを挙げていたのだが、T児は「折り紙を見せたい」と担任に話した。やはり、自信を高めているT児の姿ではないかと感じた。そこで、T児と話し合いながら、黒い画用紙に作品を1つずつ貼って紹介することにした。これまでの作品のすべてがよく見えるように、向きや場所を考えながら、四つ切の黒い画用紙に、1つずつ貼っているT児は、とてもうれしそうな表情をしていた。

T児の折り紙遊びは、この後も継続していた。新しい紙飛行機の折り方に挑戦したり、折り紙を蛇腹のように折ったものをいくつも組み合わせた作品をつくったりしており、新しい作品が次々にできた。担任だけではなく、友達からも認められたことで、T児の大きな自信につながったのだと感じる。

## 考察

周りの友達の様子を見ながら遊んでいたT児が、折り紙遊びに夢中になり、友達に折り方を教えたり、さらに高度な折り方に挑戦したりするようになった。これまで、自分の作品をそっと担任に見せに来ることがあったが、友達にその作品のよさを認められ、称賛されたことで、T児にとっての大きな自信につながったと考えられる。お楽しみ発表会で、折り紙の作品を1人で堂々と披露したことは、T児にとっての大きな成長だったのではないだろうか。

T児が、好きなことや得意なことに自信をもつことで、T児のよさを友達同士で認め合うことを願い、援助や環境構成を考えてきた。T児が折り紙で作品をつくると、担任や副担任の近くに来て、ほほえみながらそっと見せたり、完成した紙飛行機を持って遊戯室に行き、職員の前で飛ばしたりする姿から、「見て！」という言葉はなくても、自分の作品に自信をもち、たくさんの人に見てほしいという気持ちがあるのだと読み取った。自信の高まりを捉えるためには、その時の表情や、行動、しぐさ、視線など、幼児の姿全体から読み取ることが大切であり、言葉だけにとどまらないのだと感じている。だからこそ、幼児が何をしようとしているのかをあらゆる面から読み取り、その子なりの自信の高まりを感じる目を養うことを大切にしていきたい。

## <5歳クラス IX期 4・5月> 遊びの充実が、5歳クラスになった喜びの実感へ

### これまでの保育の様子

4月、5歳クラスとしてのくらしがスタートした。進級し、期待に満ちた表情をしていた幼児たち。昨年度までに自分が好きだった遊びを思い出しながら、生き物探しや泥遊び、料理づくりの遊びを思い切り楽しんでいる様子が見られた。IX期は、「5歳児になった喜びを感じる時期」である。教師は、5歳クラスならではの遊びの環境を整えることで、進級した喜びを感じられるのではないかと願い、テラスの環境を大きく更新することにした。具体的には、テラスに置いてある遊びに使わないものはすべて撤去し、5歳クラスにしかない道具を手に取りやすいように整理したことである。また、テラスの前にロッカーを設置し、個々の名前シールを貼って、自然物でつくった料理や作品を「自分の場所」にとっておけるようにした。4歳クラスの時には使ったことがなかった道具を使えるようにしたり、自分だけの保存場所をつくったりすることによって、5歳クラスとしての特別感のような思いが生まれてくることを願いながら、幼児の遊びを日々見守っていた。

その一方で、幼稚園のリーダーとしてがんばりたいという思いも支えていきたいとも願っていた。5歳クラスでは、例年、片付けの後に園庭全体の見回りを行い、残っている道具を片付けるという「うみ組パトロール」をしていた。この「うみ組パトロール」も、5歳クラスとしての喜びにつながるのではないかと捉え、パトロールでのがんばりを支えていこうと、援助の方向性を副担任と共有していた。

### 4月23日 片付けの時間

B児：「ねえAくん、もう片付けだよ。『3』(11時15分)になったら、うみの楽しいことが始まるよ」

A児：「分かっているよ、これだけつくったら行くから」

B児：「でもさ、私たちはうみ(5歳クラス)だから、もうパトロールに行かないといけないよ」

A児：「はいはい、『2』になったらやめるよ」

B児：「それだと、もうパトロール終わっているかもよ」

A児：「大丈夫だよ」

B児：「じゃあ、もう私行くね。パトロールに行ってきます」

教師：「Aくん、まだやりたかったんだね」

A児：「うん」

教師：「この後、うみの楽しいことがあるけど、『2』(11時10分)なら間に合いそうだね」

A児：「うん」

『3』(11時15分)になり、A児以外の全員が保育室に集まる。

B児：「Aくん、遅かったね。もう始まるよ」

A児：「ねえ、見て。すごいのがつくったよ」

B児：「わあ、すごい。まん丸でかわいい」

A児：「これさ、すごいんだよ。ほら、こんなに転がるの」

教師：「わあ、本当だ。おもしろいのがつくったね」

A児：「これさ、みんなにも見せたいんだけどいい？」

この日A児は、片付けの時間に一人で5歳クラスの畑で、自分の育てている野菜に水やりをしていた。その様子を見ていたB児がパトロールを促すような声をかけるが、A児は丁寧に水やりを続けていた。教師はこのやりとりを見守りながら、B児とのかかわりの中で、A児が自分の気持ちに折り合いをつけ、パトロールに目を向ける姿を願っていた。『2』で遊びをやめるのであれば、パトロールをして保育室に戻ってくる時間も十分にあると捉え、A児のまだ水やりを続けたい思いに共感しながら、『2』なら間に合いそうだね」と言葉かけをすることにした。

しかし、保育室に戻ってきたのは『3』を過ぎた頃であった。A児の手には、整った形の泥団子が見えた。畑の水やりの最中に土にふれ、泥団子をつくることを思いついたのではないかと捉えた。B児は泥団子に心が動き、その感動をA児に伝えていた。願っていた「うみ組パトロール」とは少し違う姿ではあったが、教師もその泥団子の出来映えに心が動き、その感動を伝えた。B児と「うみ組パトロール」のやり取りをしているときは、A児はどこか表情が曇っているように感じたのだが、この時は一転して、晴れやかな表情であった。

教師は、A児をこれからどう支えていこうか迷っていた。そのようなとき、研究交流の一環でT園を参観に行く機会があった。T園の幼児は、友達と会話をしながら夢中になって料理づくりをしていた。T園5歳クラス担任は、料理を食べる客になり、まるで幼児の遊びの仲間であるかのように感動を共有していた。片付けの時間になると、料理づくりをしていた幼児は、料理が入ったボウルを4人で持ち、「わっしょいわっしょい」と言いながら、まるでおみこしを運ぶかのように、生き生きと片付けをしていた。片付けが終わった後の達成感のある表情には、心を動かされた。まさに、教師が思い描いていた5歳クラスになった喜びを実感する姿であった。

T園の参観を通して、教師は2つのことに気付いた。一つは、「うみ組パトロール」への願いが先行し過ぎ

て、焦っていたことである。教師が焦っていると、何となくその焦りが幼児にも伝わり、幼児も不安な思いになってしまうことがある。もっと長期的な視野をもち、A児の育ちを支えていこうと捉え直した。もう一つは、遊びの充実が、「うみ組パトロール」へのモチベーションの源になるのではないか、ということである。これまでも、遊びで自分の思いが実現しにくかった日は、何となく片付けも停滞しているような感覚があった。遊びの中で十分楽しんだ充実感や達成感が、気持ちの折り合いにつながるのではないかと捉え直した。

A児はこれまでも、楽しそうに遊んでいるように見えた。しかし、A児の遊びが本当に充実しているのかを、もう一度しっかりと読み取っていこうと、今後の方向性を副担任とともに確認した。

## 5月2日 遊びの時間

A児：「Cちゃん、袋の準備はいい？」

C児：「うん、入れたよ。」

A児：「それは、味付けだからね。柔らかくしてね」

C児：「うん」

A児：「じゃあ焼くから、ここに載せて。油もちゃんとかけてね」

C児：「これ？」

A児：「そうそう、それ。焼いたらさ、この葉っぱに入れるから。ねえ、先生もほしい？」

教師：「え、いいの？じゃあ一つもらおうかな。何ができるんだろう」

A児：「これはハンバーガーだよ」

教師：「わあ、これはすごい。Aくんは料理の天才だね！」

A児：「お会計はスマホでいいですか？」

教師は、A児からもらったハンバーガーを持ったまま園庭を歩く。

4歳クラス副担任：「5歳クラスの先生、それは何？すごいですね」

教師：「これですか？Aくんがつくったんですよ、すごいですよね。」

しかも、料理の工程にちゃんとこだわってつくっているんです」

4歳クラス副担任：「わあ、素敵。私もAくんのところに行ってみますね」

教師：「ぜひ、行ってください！びっくりしますよ！」

4歳クラス副担任がA児のところへ行く。4歳クラス児・5歳クラス児もA児のところへ集まってくる。

4歳クラス副担任：「Aくん、ハンバーガーがおいしそうだったから、私も来ちゃった」

A児：「4歳クラスの先生もほしいの？今つくるから。待ってて。」

4歳クラスa児：「ねえ、僕もつくってほしい」

D児：「私も食べたいな」

A児：「はい分かったよ。順番につくるから、待っててくださいねー」

この日、A児は、テラスで料理づくりをしていた。A児は、肉に見立てた赤土を袋に入れ、ちょうどよい固さになるまで、手で揉んでほしいとC児に頼んでいた。これは肉に下味をつける工程であると捉えた。パーベキューの網の上に油に見立てたボトルの水をかける、網の上の肉をしゃもじで裏返すといった工程も、遊びの中で表現しているように読み取った。教師は、この様子を少し離れたところから見守りながら、心が動いた。A児がこんなにも料理の工程にこだわってつくっていたことを初めて知ったからである。A児は教師が近くにいることに気付く、「ねえ、先生もほしい？」と言葉をかけた。そして、ハンバーガーをつくらせて教師に渡した。その時の表情は、何にも代えがたいほどの笑顔であった。

教師はこのとき、もしかしたら、このハンバーガーを他の幼児や職員が目にするきっかけがあれば、A児の遊びの充実につながっていくのではないかと考え、ハンバーガーを持ったまま、園庭を歩いてみることにした。園庭を歩いていると、最初に心を動かしたのは、4歳クラス副担任であった。4歳クラス副担任は、近くにいた4歳クラス児と一緒に、A児のところへ行き、その感動を伝えた。後から4歳クラス副担任と話し、A児は光輝くような表情でハンバーガーをつくらせていたと聞いた。

副担任との振り返りでは、この日のA児の遊びは、充実していたのではないかと話し合った。A児のところに、自然と多くの幼児や職員が集まり、A児がしていることにみんなで心を動かしたこと、みんなで楽しさを共有したことを「充実」と捉えた。やはり楽しい雰囲気のところやおもしろいことをしている場には、自然と人が集まり、自然とかかわりが生まれ、自然と認め合いが生まれる。また、教師が料理の工程にこだわる遊びの「楽しさ」を読み取ることができたのは、T園を参観し、自身の保育を捉え直したからではないかと共有した。改めて他の園の保育や、見方・考え方にふれることの大切さを実感した。

4歳クラス担任が、A児のところから離れた後は、5歳クラスの副担任が、A児のハンバーガー屋さんの看板づくりを支えたことを聞いた。やはり、その時にも、笑顔で看板をつくらせていたようだ。今後も、A児の料理遊びがさらに充実していくためにはどうすればよいかを、副担任とともに考えた。A児は多様な料理や、料理の工程について知識がある。そこで、多様に料理づくりを楽しむ姿を思い描き、ふるい、計量カップ、プ

ラスチックのグラスなど、調理や食事に使う道具の種類を増やしてみることにした。

#### 5月9日 遊びの時間～片付けの時間

A児：「今日はカレー屋さんをしよう」  
E児：「じゃあ私は、ご飯を取ってくるね」  
A児：「僕はカレーをつくるから。今日は外国のカレーと日本のカレーをつくって、レストランにしたいな」  
B児：「外国のカレーって、何？」  
A児：「ほら、緑色のだよ。待ってて、葉っぱを採ってくるから」  
A児が戻ってくると、補佐員と3歳クラス児が椅子に座る。  
補佐員：「わあ、おいしそうなお料理。ここはレストランかしら」  
A児：「そうだよ。補佐員の先生とそらさんも食べていく？」  
3歳クラスa児：「うん食べたい」  
A児：「それでは、まずはお水をどうぞ」  
補佐員：「ありがとう。本当のレストランみたい」  
A児：「カレーができるまで、少々お待ちください」  
カレーが出来上がる。  
補佐員：「わあ美味しそう。いただきます。おいしいね」  
3歳クラスa児：「おいしい」  
教師：「わあ、今日もレストランが大繁盛だね」  
A児：「まあ、うみ組は料理上手だからさ」  
教師：「さすが、料理の天才！」  
片付けの時間になる。  
A児：「Eちゃん、片付けてパトロールに行こう。うちらはうみ組なんだから」  
E児：「うん、早く片付けよう」  
A児：「じゃあ、これを僕が運ぶから、Eちゃんは洗ってくれる？」  
E児：「分かったよ」

ハンバーガーづくりをしていた日から、この日までの1週間、A児の料理づくりは、つくるものや場所を変えながら続いていた。この日は、カレー屋さんをしていた。教師は少し離れたところからその様子を見守っていた。A児とB児E児の会話を聞きながら、A児のつくった料理は、日本のカレーは、普段よく目にするカレーライス、外国のカレーは、グリーンカレーなのではないかと読み取った。やはりA児の料理の知識の多さに感心しながら、遊びを見守っていた。そこへ補佐員が3歳クラス児数名とともに、やって来た。A児は、補佐員と3歳クラス児がレストランのお客さんであると分かったら、プラスチックのグラスに入れた水を提供した。教師は、お店での飲食の流れも表現していることに、また心を動かした。教師は、A児の自信につながるよう、A児を称賛する言葉をかけた。この日もA児のお店には多くの幼児や職員が集まり、A児は満足感があつたのではないかと読み取った。

片付けの時間になると、A児はE児に「片付けてパトロールに行こう。うちらはうみ組なんだから」と話した。これを近くで聞いていた教師と5歳クラス副担任は、思わず目を見合わせた。このとき、言葉は交わさなかったのだが、心を動かしたことが互いに感じられた。この日の振り返りでは、A児の遊びの充実が、「うみ組パトロール」をがんばりたいという思いの源になり、5歳クラスとしての自覚や、喜びの実感につながっているのではないかと共有した。また、A児の遊びの充実には、他クラスの職員との連携が欠かせなかったのではないかと話し合った。A児のこれまでの遊びの履歴を大まかに知り、打ち合わせがなくても同じような方向性で保育ができていくことに喜びを感じた。週1回のカンファレンスを繰り返すことで、保育の方向性が揃ってきているのではないかと捉えた。

その後もA児は、違う遊びにも興味をもちながら、料理づくりを続ける姿が見られた。笑顔で片付けや「うみ組パトロール」をする姿も増え、5歳クラスになった喜びを実感しているのではないかと思う日が増えてきた。

## 考察

長期的に幼児の育ちを支えていきたいというスタンスは大切であると考えている。そのような考えが大切だと頭の中では理解している反面、実際に保育をしている中で、本当に育ちが見られるのだろうか、これで間違っていないのだろうかと焦ってしまうことがある。願いが先行し過ぎている自分の姿に気付くことができたのは、参観に行ったT園の先生方のおかげであると思っている。時々、他の園の幼児の姿、保育者の援助、環境構成、他の園の保育観にふれることは、自分の今の保育の捉え直しにつながると考える。このような交流を続けていくことの価値を改めて感じている。

また、A児の姿を見ていると、自分で遊びを充実させ、自分で気持ちに折り合いをつけ、自分のくらしを豊かにしているのではないかと捉えた。今年度のカンファレンスの中で何度も「幼児は有能な存在」であるという言葉聞いたが、まさにその通りであると実感した。幼児の自分で育とうとする力を信じながら、育ちの「きっかけ」をつくれるような教師でありたいと、改めて捉え直した。

## < 5歳クラス X期 6月 > 幼児を「信じる」ことを大切に、主体的な遊びを支える

### これまでの保育の様子

5歳クラスの幼児は、料理づくりや生き物捕まえなど、自分たちが好きな遊びに、日々夢中になっていた。また、5歳クラスでの暮らしにも慣れ始めたのか、ペットボトルロケットや木の実のジャムづくりなど、これまでにやったことがない遊びを始める幼児もいた。遊びの中で、幼児同士が会話をしてイメージを共有したり、役割分担をしたりする姿が、これまでよりも多く見られるようになっていた。

担任は、昨年度のA園との交流で1年間にわたって語り合ってきた「かわりには、遊びに夢中になる中で自然と生まれてくるもの」という認識を大切に、幼児一人一人が今夢中になれる遊びがあるのか、夢中になって遊べる環境は整っているのかを、副担任と毎日のように語り合っていた。協同して遊ぶことへの芽が育ってほしいと願う一方で、やはり、個々の遊びの楽しみはよく読み取ってほしいと、副担任と援助の方向性を確認していた。

そのような中、F児は朝の受け入れの際に担任の隣に座り、担任が受け入れを終わるのを待って一緒に園庭に遊びに出るということが数日間続いていた。これまでとは少し違う様子が続いたので、F児と会話してみると、友達とトラブルがあったり、環境の変化があったりしたわけではなく、今夢中になれる遊びが見付からずにいるのではないかとということが読み取れた。F児の思いに寄り添いながらも、まずは、夢中になれる遊びが見付かるように支えてほしいと考えた。そこで、F児の好きな遊びが見付かることを願って、多様なジャンルの本を集め、保育室の本棚の本を毎週20冊ずつ入れ替えて、環境構成を行った。

5月30日

朝の支度を終えたF児とG児が、保育室の本棚から、「土の色って、どんな色？」の本を手取る。

F児：「ねえ、Gちゃん。これ、おもしろそう！」

G児：「さらさらだね」

F児：「ねえ、今日はこれをしない？」

G児：「いいね、やろう。じゃあさ、チョコ山でやろうよ」

F児：「うん、そうしよう。早く外行こうよ」

G児：「まって、先生も見て！ここにね、こんな本があったんだよ。今日はこれをするんだ！」

担任：「へえ、おもしろい見付けたね。これで、何をしたいの？」

G児：「私たち2人で、土を集めるんだよ」

F児：「そうだよ、私はね、全種類集めたいんだ」

担任：「ここに出てる土を全種類集めたいってこと？」

F児：「そうそう。Gちゃん、早く行こうよ！」

F児とG児がチョコ山に行き、粉ふるいを使って、赤土をふるっている。

F児：「いっぱい集まったね」

G児：「これ、どうする？」

F児：「何かに入れてとっておこう。先生、ケースください」

担任：「オッケー。どんなケースがいい？」

F児：「前に、石を入れてたみたいなのがいいな。お部屋に分かれているやつ」

担任：「ああ、あのケースね。確か、『うみ』の棚にあったような」

F児：「ああ、あそこね。じゃあ私とってくるね！」

G児：「私も行く！」

F児は、朝の支度を終え、新しい本が本棚に並んでいることに気付いた。「土の色って、どんな色？」という本を手取り、近くにいたG児に声をかけた。この本には、数十種類の目の細かな土の写真が載っている。F児は、園庭にも同じ色の土があるのではないかと期待に胸を膨らませ、G児を誘って園庭に行こうと声をかけたのではないかと読み取った。

担任は、朝の受け入れをしながら、二人の様子を見守っていた。この本を使って何をしたいのかを聞くと、F児は「土を全種類集めたい」という思いを話した。これまで、石を集める遊びは、園では毎年のように見られていたが、土を集める遊びは担任の想定を大きく超えていた。その発想に心を動かしながら、2人を見守っていた。F児とG児は、赤土の山（チョコ山）に行き、粉ふるいを使って赤土をふるって、目の細かな土を集めていた。すると、F児から「ケースください」という要望があった。担任は、どのようなケースがF児のイメージに合うのかを知りたいと願い、F児に問い返すことにした。仕切りがあり、「お部屋」ごとに違う土が入られるようなケースの場所をF児に伝えると、うれしそうな表情で取りに行く姿が見られた。この姿を見ながら、担任もこれから始める土集めの遊びがどうなっていくのか、期待で胸がいっぱいになった。

この日の副担任との振り返りでは、「幼児は遊びをつくる天才」とであると話題になった。F児が「土の色って、どんな色？」の本から、土を集めるという遊びを生みだしていくことは、担任は全く想定していなかった。

た。しかし、このような想定外の遊びが生まれたことを副担任と共に喜んだ。幼児の無限の可能性を感じられたからである。今年度のカンファレンスの中でも「子どもは有能な存在である」とよく話題になったが、まさにF児の姿から、この言葉が実感のある言葉になったことを共有した。担任が意図的にF児を遊びに誘ったり、他の幼児とつないだりするのではなく、F児は、自分で遊びを見つけていけると信じて支えることが大切であると改めて考えた。そして、保育室の本を20冊入れ替えておいたことは、教師の想定外の遊びが生まれるような環境、つまり、幼児の新たな遊びをつくり出すきっかけとなるような環境になっていたのではないかということも話し合った。

さらに、この遊びの中には、幼児にとってはもちろん、教師にとっても大きな発見や感動があるのではないかとということも共有した。遊びを見守るスタンスを基本としながらも、幼児とともに心を動かしながら、一緒に遊びを楽しんでいこうと、今後の方向性を確認した。

この日、F児とG児の遊びの様子を、H児がじっと見つめる様子があった。もしかしたら、F児やG児の楽しそうな姿を見て、H児もこの遊びに入りたくなかったのではないかと読み取った。これまでの幼児の遊びを見てみると、楽しい雰囲気があると、自然とそこには幼児が集まり、かかわりが生まれ、遊びが広がったりする様子があった。もし、H児をはじめ、他の幼児がこの遊びと一緒にやりたいと思ったとき、すぐに遊び出せるようにしたいと願い、環境構成として、粉ふるいとケースを新たに2セット、テラスの棚に入れておいた。

6月7日

H児：「Fちゃん、すごいね。こんなに集めたの？」

F児：「そうだよ、私とGちゃん集めたんだよ」

H児：「うわあ、すごい。ぼくも入一れ一て」

I児：「私も、入一れ一て」

F児：「いーいーよ」

H児：「ぼくもこのケースほしい」

F児：「あそこの棚にあるよ」

F児、G児、H児、I児は、園庭に土を取りに行き、土を粉ふるいでふるうことを繰り返している。

H児：「あれ？この土、レアだね。どこにあったの？」

F児：「これは、お花の土だよ。で、こっちがああの木の下のやつ」

担任：「え、Hくんのケースにも、同じのあるんじゃない？何か違うの？」

H児：「よーく見て。色がちょっと違うでしょ」

F児：「そうだよ、それに触ってみて」

担任：「本当だ！なんか違うね！」

G児：「そうだよ、こっちの方がさらさらなの。すごいでしょ？」

担任：「すごい、これは大発見！」

H児：「あ、いいこと考えた！じゃがいもの土は、これとはまた違うんじゃない？」

F児：「そうかも！Hくん、一緒に畑に行ってみよう」

I児：「私も一緒に行く！」

F児：「じゃあ、Gちゃんは、ここで土を守ってて。すぐにとってくるから！」

G児：「はい」

この日、F児が始めた土集めの遊びに、H児とI児が加わった。F児が毎日夢中になって土集めをしていたため、その楽しそうな雰囲気を感じ取ったのだろうと捉えた。やはり、かかわりは、遊びに夢中になる中で自然に生まれてくるものであると改めて実感しながら、遊びを見守っていた。

F児、G児、H児、I児の4人は、園庭の様々なところの土を取りに行つては、粉ふるいを使って目の細かな土を集めることを何度も繰り返していた。途中、H児は、F児のケースに入っていた灰色の土を見て、「レアだね」と言った。しかし、担任には、H児のケースの中にも、同じ灰色の土が入っているように見えた。そのため、何が違って「レアだね」と言ったのか気になり、H児に聞いてみることにした。担任は、H児に言われた通りに2つの灰色の土を「よーく」見た。すると、遠くで見ていた時には気付かなかった色の違いがあることに気付き、心が動いた。さらに、F児に言われた通りに灰色の土に触ってみると、粒の大きさが微妙に違うことに気付き、また心を動かされた。担任は精一杯の言葉でその感動を2人に伝えた。

次の瞬間、H児が「いいこと考えた！」と大きな声で言った。場所による土の違いに気付き、「じゃがいもの土」も集めてみたくなかったのではないかと捉えた。それを聞いたF児も、じゃがいも畑の土はまだ集めていなかったようで、H児と一緒に嬉しそうな表情で集めに行く姿が見られた。

この日の副担任との振り返りでは、幼児はかかわりの中で、自分たちで遊びを広げていけることが話題になった。F児とH児のように、かかわりの中で土の質の違いに気付き、新たな土を求めて取りに行く姿は、まさに、自分たちで遊びを広げている姿である。担任は、このような気付きが生まれ、遊びが広がる瞬間に立ち



会えたことをうれしく思い、その心の動きを副担任と共有した。幼児にとって、かかわりの中での育ちが、いかに大きいかを改めて感じた。そして、教師が幼児のかかわりに入るときは、幼児同士で気付きを生みだしていく姿を信じ、答えになるようなことを暗示したり、教師の思う方向に誘導したりしないことに配慮していきこうと、今後の方向性を確認した。また、粉ふるいとケースを追加で準備しておいたことで、H児、I児が自然と遊びに加わり、かかわりの中で遊びを広げていくことにつながった。かかわりが自然と生まれるような環境を整えていくことの大切さも、改めて話し合った。

この日からさらに1週間近く、F児を中心として、土集めの遊びは続いていた。ある雨の日、F児はいつものように園庭の土を集めるために友達と園庭を散策していた。そして、モミジバフウの木の下にぬかるんだ粘土質の土があることに気付いた。この土を手にとってみると、まるで粘土のような感触があったようである。F児は「粘土みたい、おもしろいね」と、友達と会話をしながら粘土質の土を手の中で転がし、丸めていた。そのうちに「あ、いいこと考えた！これでお皿がつかれるかもしれない！」と大きな声で話した。F児のお皿をつくりたいという思いを読み取り、もしかしたらF児は、翌日以降、粘土質の土を使ったお皿づくりをして遊ぶかもしれないと考えた。そこで、保育室に、陶芸の絵本を置いたり、モミジバフウの木の下に木製のテーブルを動かしたりして、粘土の遊びができる環境を整えておいた。

6月19日

F児：「先生、見て。お皿ができたよ！」  
担任：「すごいねえ、本当に使えそうだねえ」  
F児：「うん、私、これを焼きたいんだけど」  
J児：「そうだよ、焼くと、本当のお皿になるんだよ」  
担任：「そうなんだね、でも、どうやって焼こうか？」  
F児：「まずはさ、かまどをつくって、そこに火をつけるの」  
H児：「いいねえ、おもしろそう！やろうよ」  
担任：「かまどって、なあに？」  
J児：「かまどは、お皿を焼くところだよ」  
H児：「ブロックとかが必要だよ」  
J児：「そうそう、ブロックを積んで、火が広がらないようにするんだよね」  
F児：「今からつくろうよ！」  
J児：「いいねえ、みんなで一緒にやろうよ」  
F児：「うん、そうしよう！」

ぬかるんだ粘土質の土を見つけた翌日、F児とJ児はモミジバフウの木の下でのテーブルを使って、粘土遊びを始めた。二人で粘土をお皿の形に成型していると、楽しそうな雰囲気を感じて、多くの友達が遊びに参加した。F児とJ児は、お皿ができるとそれを担任のところに見せに来た。会話の中で、F児は、かまどをつくってお皿を焼きたいという思いをもっていることが読み取れた。4歳クラスのとくに、親子行事で陶板づくりをした経験からか、保育室に置いてあった陶芸の本からか、焼くと固くなるという知識があったものと捉えた。担任は、F児とJ児のイメージの共有を願い、どうやって焼くのか、かまどはどんなものかを問いかけた。担任は、二人の「焼く」という発想に驚かされ、心が動いていた。

しかしながら、幼児がかまどをつくり、そこで皿を焼くことは本当に実現可能なのか、担任自身も思い描けていなかった。この日の振り返りでは、副担任と二人で時間をかけて実現の可能性について話し合った。幼児が自分たちで実現させていく姿を信じたいと願う反面、安全面には最善を尽くす必要があるため、主体は教師になってしまうのではないかと、話し合いながら葛藤していた。結局、2人で話し合ってもなかなか方向性が見い出せずにいた。そこで、他のクラスの職員に、この迷いを話してみることにした。

他クラスの職員から、初めて出てきた感想は、「おもしろそう！」「いいですね！」であった。担任はこの瞬間、F児の「やりたい」を職員全員が肯定的に支えたいと願ったこと、他クラスの幼児でも職員全員が全面的に支えたいと願ったことを、心からうれしく思った。その上で、幼児の安全面への配慮や、段取り、時期について一緒に考えた。「年下の幼児が火に近づかない工夫」「水の準備」などの安全面の配慮については、園長を介してF児に伝わるようにすることも、この時共有された。

担任・副担任だけでは、幼児が自分たちで実現させていく姿は信じきれなかったが、全職員で共有することにより、実現の可能性が見えてきた。幼児の自ら育とうとする姿を信じる職員集団の中で保育をしていることをうれしく思いながら、F児の今後の遊びへの期待感が、さらに高まったように思えた。

6月27日

H児：「次はFちゃんの番だよ」  
F児：「私、こわい」  
H児：「大丈夫だよ、一緒にやろう」  
担任：「Fちゃん、こわいよね。どうしようか？」  
F児：「Hくん、火つけるのお願いしてもいい？こわいから、私は見えてもいい？」  
H児：「うん、分かった。じゃあ、ぼくがするね。みんな、いくよ！」  
マッチを擦って、かまどの中に入れる  
H児：「ついたー！」  
担任：「やったね！」  
F児：「ついたね！私、お皿持ってくるね！」  
J児：「Fちゃん、熱いから、これを使って置くんだよ」  
F児：「分かった、ありがとう」  
担任：「Fちゃん、よかったね」  
F児：「うん！私、今日これ、持って帰ってお家で使いたいんだ！」

いよいよかまどに火をつける日がやってきた。F児を中心に、幼児が1週間かけて準備を行ったかまどであるため、幼児の期待感や高揚感がとても高いように感じた。F児は、自分でマッチに火をつけるのがこわかったため、H児に自分からお願いする姿が見られた。担任はその様子を見て、安全面に細心の注意を払って見守りながらも、F児がかかわりの中で自分の思いを実現させていく姿に育ちを感じ、心が動いていた。

F児はついに、かかわりの中でお皿を焼くことを実現した。この日の降園時、F児は、迎えに来ていた保護者にお皿が焼けたことを、一番に話していた。その時の表情は、何にも代えがたいほどの笑顔であった。F児の顔を見たとき、担任は、迷いながらもF児の自分で実現していく姿を最後まで信じ、支えてくることができたことをとてもうれしく思った。

今後も、今回のかまどのように、実現が可能か否か、迷う場面が出てくると考える。この日の副担任との振り返りの中で、例え実現できなかったとしても、幼児が実現していく姿を思い描きながら、教師も一緒にできるだけのことはやっていきたいということ共有した。そして、迷った時には、同じ方向性の中で保育をしている仲間と相談しようと、今後の方向性も確認した。幼児の思いを肯定的に捉え、幼児の可能性の大きさを信じることによって、主体的な遊びを支えていきたいと、思いを新たにしている。

## 考察

F児の土を使った遊びは、土集めに始まり、かかわりの中で、土のお皿づくりにまで広がっていった。周りの幼児とかかわりながら、自分のやりたいことを実現させていくF児の姿に、大きな育ちを感じた。やはり、A園との交流から学んだように、「かかわり」は教師が意図的につくるものではなく、遊びの中で多様な「ひと、もの、こと」に出会う中で自然と生まれてくるものである。そのために教師は、まず、多様な「ひと、もの、こと」に出会える環境、そして、遊びに夢中になれる環境を整えていくことが大切であると捉え直した。

そして、何より大切にしたいのは、幼児の自ら育とうとする姿勢や、幼児のもつ可能性の大きさを「信じる」ということである。教師の想定外のことを幼児とともに楽しめるか、実現が難しいと思うことも、幼児を信じることで肯定的に捉えられるか、幼児は有能な存在であると信じられるか…。

しかしながら、頭の中で「信じる」ことを大切にしたいと思えるのだが、いざ幼児を目の前にしたときには、時間や場所の制約、安全管理などの面から、難しい場合がある。そんなとき、保育の迷いや悩みを共有できる職員の存在の大きさに気付く。教師一人では難しいことも、全職員で考えれば実現できることも多いのではないかと考える。今年度、研究の一環で、他園の職員と、継続的に、双方向に交流を行っている。園の垣根を越えて、保育の悩みや迷い、喜びを共有する仲間、保育において大切なことを確認し合うような仲間を、一人でも多くつくっていったらと、思いを新たにしている。

## < 5歳クラスX期 11・12月 > 「かかわりが深まる」姿を考え続け、援助する

### これまでの保育の様子

11月、5歳クラスの子どもたちは、落葉樹の葉っぱを集めて「忍法雲隠れの術」をしたり、松の木の枝で「弓矢」をつくって飛ばしたり、泥に葉っぱの「スタンプ」をしたりと、秋ならではの遊びを楽しんでいた。どの遊びにおいても、一人で遊ぶというよりは4、5名で集まって遊びが展開されるようになってきており、役割分担をしながら、みんなで一つのものをつくったり、一つのイメージや目的を共有したりするような遊び方であった。

XI期は「友達関係を深めながら遊びを充実させていく時期」である。一見すると、このように遊んでいる子どもたちの姿は、友達とのかかわりが深まり、遊びが充実している姿とも捉えられる。しかし、教師は本当に目の前の子どもたちの姿は、かかわりが深まっている姿なのか、分からなくなっていた。本園の研究「つながる保育」で、他園の多様な保育や価値観に継続してふれてきたことによって、教師がよく自身の保育を問い直すようになったためではないかと思っている。研究の手応えを実感しながらも、かかわりが深まっている姿とはどのような姿なのか、教師はどう支えることでかかわりが深まるのか、そして、かかわりが深まった先にはどんな育ちがあるのかなど、目の前の子どもの姿と照らして、問い直し続けていた。

そのような中、ある日の遊びの時間に、K児がL児、M児と一緒に園庭で花を集めている姿を見つけた。これまでの遊びの中でK児は「いいこと考えた！」と言いながら、自分の考えたことを試す姿がしばしばあった。そのため、K児の発想で遊びが始まり、この遊びによってK児のかかわりが深まる姿が何か見られるのではないかと思い、遊びの様子を見守ることにした。

11月15日

K児：「いっぱい集まったね」

L児：「あ、先生。ねえ見てよ。こんなに集まったよ」

担任：「わあ、本当だ。よくこんなに集めたね。1・2・3…」

L児：「全部で6種類だよ」

K児：「ねえ、早く探しに行こう！」

M児：「私、いっぼんぬーけた」

担任：「え、やめちゃうの？」

M児：「うん、だってさ、もうお花はないから。飽きちゃったし」

L児：「やめちゃうの？じゃあ、ぼくも違うことする」

K児が一人でその場に残る。

担任：「Kちゃんは、どうしたいの？」

K児：「園庭のお花を全種類集めて、花束をつくりたいんだけど、でも一人じゃ無理だから、じゃあ私も違うことする」

担任：「本当にいいの？」

K児：「うん、ブランコもやりたいから、ブランコに行ってくるね」

K児、L児、M児は、「園庭の花を全部集める」という目的を共有し、保育室前のテラスに花を集めていた。テラスは6種類の花で彩られ、教師も心が動くような美しさであった。しかしながら、急にM児が遊びをやめるとみんなに話した。担任はやめたいと思ったM児の考えの背景が知りたくなり、M児にその理由を聞くことにした。結局、一人で残ったK児。会話の中で、K児は遊びを続けたいという思いはあったが、一緒に遊んでいたM児、L児がやめてしまったことで、気持ちが花集めに向かなくなってしまうのではないかと読み取った。「本当にいいの？」と念押しはしてみたが、やはり、M児は花集めの遊びをやめてしまった。

この日の副担任との振り返りでは、3人で遊んでいても、やはり一人一人に目を向けることが大切であると共有した。この遊びを思い返すと、3人が感じている楽しみがそれぞれ違っていたのではないかと振り返った。そのため、M児はどこに花がもっとありそうかを会話することができたら、もっと遊びに夢中になっていったかもしれない。L児は、K児の発想がおもしろそうだが、集めてどうしたいのか、その先のイメージが何となくもちにくかったのではないかと振り返った。そのため、K児がこの後どうしたかったのかを知る機会があれば、もっと遊びに夢中になっていたかもしれない。K児のかかわりを深めることを願うとき、教師がつながるのではなく、やはり一人一人が遊びに夢中になることを支えることで、自然とかかわりが深まっていくのではないかと考えた。

この振り返りを通して、かかわりが深まるということの大前提には、一人一人が遊びに夢中になるということがあるのだと捉え直した。そして、そこにいる教師は、子ども同士を無理につなごう、かかわらせようとするのではなく、一人一人が遊びの中で何をしたいのかをよく見たり、適宜遊びの仲間に入ったりしながら、イメージや目的が共有できるようにして支えていこうと、今後の援助の方向性を再確認した。

11月26日

K児：「あ、いいこと考えた！クレーンゲームをつくって、ゲームセンターにしたい」  
N児：「え、何かおもしろそうだから。おれも手伝うよ。何したらいい？」  
M児：「じゃあ私もいーれーて」  
O児：「私もいーれーて」  
K児：「うん、いいよ。じゃあ、MちゃんとOちゃんは、段ボールを切って。Nくんは、クレーンのつめを手伝って」  
O児がM児と一緒にダンボールを組み立て、切ろうとしている。  
O児：「Kちゃん、どうやって切ったらいい？」  
K児：「真ん中を切るんだよ。こんな感じて窓にするんだよ」  
M児：「え、どういうこと？」  
K児：「こうだよ、こう」  
M児：「え？どこ？」  
担任：「Kちゃん、これ、使う？」 マジックペンを渡す  
K児：「うん、使う。ここだよ」  
M児：「ああ、そういうことね。分かったよ、まかせて」  
N児：「Kちゃん、つめて何？」  
K児：「つめはさ、おもちゃをつかむところだよ」  
N児：「え？」  
担任：「これだとどこのことだろう？」  
K児：「Nくん、ここだよ、ここ」  
N児：「ああ、ここか。分かった。やってみる！」  
K児とN児が一緒につめをつくっている。  
K児：「ねえ、本当につかめるようにしたいんだけど、  
どうしたらいいと思う？」  
N児：「このストローのつめがふにゃふにゃだから、  
もっと固くしたらいいかな」  
K児：「でもどうしようか？」  
担任：「うーん、どうしようかねえ」  
N児：「あ、割り箸とかあればいいんじゃない？」 割り箸を取りに行く  
K児：「割り箸だと、今度は曲がらないね…。何かいい方法ないかなあ」

ある日K児が保育室の本棚から、クレーンゲームの絵が描いてある本を手に取り、「いいこと考えた」と大きな声で言った。教師は、K児がやりたいことが見つかり、心を動かしたのではないかと捉え、K児の様子をしばらく見守ることにした。K児の楽しそうな雰囲気を感じ取ったN児、M児、O児が遊びの仲間に入り、K児を中心に自然と役割分担ができていった。やはり楽しい雰囲気のところにかかわりが生まれるのだなと感じながら、教師はその様子を見守っていた。

しばらくすると、段ボールを切り取る場所をめぐって、K児がM児にイメージを伝えている姿が見られた。K児が真剣に伝えようとしている様子から、イメージが共有されることを願って、担任は近くにあったペンを使うかどうかを聞いてみることにした。切るところが視覚化されたことで、M児は夢中になって段ボールを切る姿につながったのではないかと捉えた。

N児は、K児のいう「つめ」というのが何か分からず、戸惑っている様子であった。担任は、N児とK児のイメージの共有を願い、K児が見ていた本だとどこの部分なのかを聞いてみた。すると、K児のいう「つめ」がクレーンのアームの先の部分であることがN児に視覚的に伝わり、2人はつめづくりに取りかかった。

教師は、K児とN児のつめづくりを見守る中で、一つ心配していたことがあった。それは、クレーンのように何かをつかむようなしかけをつくるのは、今の2人の知識の範囲を超えているのではないかということであった。しかしながら、2人の様子を見てみると、ストローや割り箸など、保育室にある材を試しながら、何度も相談してつくりかえていた。教師が入って一緒に考えることよりも、この2人が何度も試していく中でこそ、かかわりが深まっていききっかけが生まれるのではないかと捉えた。そのため、あえて2人の様子を見守ることにした。

この日の副担任との振り返りでは、K児の友達とのかかわりが話題の中心となった。イメージを共有できるように願い、ペンや本を使って視覚的な援助をしたこと、そして、迷いながら試す姿を見守ったことは、K児のかかわりの深まりにつながっているのではないかと共有した。この日のK児の姿から、自分のイメージの具現に向けて何度も試す中で、迷ったり悩んだりして心を動かしている時、自然とかかわりが深まっていくのではないかと考えた。

K児とN児のつめづくりは、翌日以降も続いた。つくりはじめて3日後、3本のストローにモールを通し、

それを紙コップにつけて上下させることで、つめが開いたり閉じたりするようなしかけを完成させた。今後も、K児がゲームセンターをつくるのに使えそうな段ボールや廃材を準備して環境を整えながら、K児の心の動きを今後も見逃さず読み取りながら支えていこうと、援助の方向性を副担任と共有した。

11月29日

K児がやま組（4歳クラス）に行く。  
K児：「やま（4歳クラス）さん、うみ（5歳クラス）に来ると  
クレーンゲームができますよー」  
4歳クラスa児：「え？私、行きたい」  
4歳クラスb児：「おれも。楽しそう」  
4歳クラス副担任：「えー私もそれ見たい。Kちゃん、行ってもいい？」  
K児：「うん、先生もいいよ。じゃあ準備するから、すぐ来て」  
K児がうみ組（5歳クラス）に戻ってくる。  
4歳クラス副担任：「え、これすごいんだけど。誰がつくったの？」  
K児：「私！あとはNくんとかMちゃんも手伝ってくれた」  
4歳クラス副担任：「え、Kちゃんが？すごいんだけど！本物みたい！」  
K児：「こうすると本当につかめるんだよ」  
4歳クラス副担任：「これを思いつくなんて、小学生かと思っちゃった」  
K児：「もう小学生だからさー」  
担任：「やま（4歳クラス）さんたち、うみ（5歳クラス）さんになると、すごいをつくるんだね。これ、  
どうやって遊ぶんだろうね？」  
K児：「待って、順番にお話するから。まずは、このレバーを倒すと、これがこっちに動くの。このボタン  
を押したらね、本当におもちゃをつかむんだよ」  
4歳クラスa児：「これおもしろい！」  
4歳クラスb児：「ねえ、つぎは僕の番！早く早く！」  
K児：「大丈夫、すぐ順番が回ってくるから」  
4歳クラス副担任：「ねえ（5歳クラス担任）先生、本当にすごいですね」  
担任：「本当にすごいですよね。ねえ、Kちゃん」  
K児：「うん、私って天才かもしれない！」

この日、担任が朝の受け入れを終えると、K児がやま組（4歳クラス）に楽しそうに向かう姿が見られた。K児について行き、様子を見てみると、K児はクレーンゲームをしたい年下の幼児を募っていた。遊びに夢中になっていると、自分のつくったものを見てほしいという思いが高まり、自然とかかわりが生まれるのだと改めて感じながらK児を見守っていた。

K児の呼びかけに応じて、4歳クラスa児、b児、そして4歳クラス副担任の3人がうみ組5歳クラスに遊びに来た。担任はこの時、K児の「年下の幼児に見せたい」という思いの背景にあるこれまでの遊びの中での頑張りや育ちが、多くの人に伝わってほしいと願っていた。4歳クラス副担任には、日々の語り合いや「のびのび保育シート」での共有によって、その願いが伝わっていたため、K児の頑張りや称賛する言葉がけをしてきたのではないかと捉えている。特に事前に打ち合わせをしたわけではないが、クラスの枠を超えて援助の方向性が揃っていることを嬉しく感じた。

4歳クラスの2人の幼児に、意気揚々とやり方を説明する姿、「私って天才かもしれない！」と誇らしげに言った姿に、担任は心を揺り動かされた。そして、副担任のところへすぐにこの感動を伝えるに行き、喜びを共有した。K児の自分から年下の幼児にもかかわろうとする姿や、自己肯定感を高めている姿は、かかわりを深めながら遊びに夢中になっていったことから見られた姿であると捉えた。かかわりを深めることが、自信につながり、自分からもっとかかわってみようとする姿にもつながるのではないかと、K児の姿から気付かされたように感じた。

K児はこの日の降園時、「うみ組（5歳クラス）みんなでゲームセンターをつくりたいなあ」とつぶやいていた。そこで、K児が自分の言葉で5歳クラスの幼児に自分のイメージを伝える姿を願い、「みんなの時間」に遊びの紹介をする時間を設定して、K児が話せる環境を整えた。

K児：「私さ、ゲームセンターをつくりたいんだ」  
P児：「あ、知ってるよ！昨日やってやつ。あれでしょ？ねえ、僕もそれやりたい」  
K児：「うんいいけど、ゲームセンターができてからね。でもさ、一人じゃできないんだよね。だから手伝ってほしいんだ」  
Q児：「ゲームセンターをつくったら、Kちゃんはどうしたいの？」  
K児：「みんなで遊びたいの。やま（4歳クラス）さんとかそら（3歳クラス）さんも呼びたい」  
M児：「いいね、おもしろそう」  
N児：「でもさ、ゲームがこれしかないよ」  
K児：「これからつくればいいんだよ。あとはさ、ゲームセンターには自動販売機があるから、それも」  
Q児：「じゃあ、私、たいこのゲームつくるね」  
P児：「ぼくは、ガチャガチャ」  
担任：「わあ、おもしろそう。どこをゲームセンターにするの？」  
K児：「うーん、うみ組（5歳クラス）のお部屋かな」  
N児：「でもさ、それだとみんなが分からないから、遊戯室がいいんじゃない？」  
R児：「僕はみんなが使えるようにお金をつくるよ」

みんなの時間での遊びの共有は、これまでに何度か経験がある。担任が「何かお話ししたいことがある人はいますか」と聞くと、K児が真剣なまなざしで手を挙げた。K児は、「手伝ってほしい」ということを自分からみんなに伝えた。担任はこの姿を見た時、K児のかかわりが深まっている姿であると捉えた。友達に自分がしたいこと、困っていること、協力してほしいことを本音で伝えているのではないかと読み取ったからである。これまでK児は自分が友達のしたいことを手伝う姿はしばしば見られたのだが、自分が手伝ってほしいと言ったことはあまりなかったように思い返した。友達を信頼しての言葉だったのではないかと思うと、大きな育ちであると感じながら話し合いを聞いていた。また、この話し合いでは、子どもたちが提案したり質問したりして進んでいったため、担任のコーディネートは場所をどこにするか考えるきっかけになる言葉がけをただけであった。これもかかわりが深まっている姿と捉えた。

この話し合いの翌日には、K児を中心に数名が自動販売機づくり、Q児を中心に数名がたいこのゲームづくり、P児がガチャガチャづくり、R児を中心に数名でお金づくりを始めた。これまでにあまりかかわることがなかった友達同士で自然と集まっている様子も見られた。ゲームセンターができると、3歳クラス児と担任、4歳クラス児がたくさん訪れ、楽しむ様子が見られた。K児は、その様子を見ながら担任に「やっぱり私、天才かも」と満面の笑みで伝えた。かかわりが深まることが、こんなにもK児の自信を高めるのだと、思いを新たにした。

## 考察

K児の遊びを支える中で、かかわりが深まっている姿とはどのような姿なのか、教師はどう支えることでかかわりが深まるのか、そして、かかわりが深まった先にはどんな育ちがあるのか、K児の姿をもとに自分なりに考え、少しずつ言語化していくことができたのではないかと思う。やはり、一人一人が遊びに夢中になることなしには、かかわりは深まらないのではないか。夢中になる中で、つくったものを見てほしいという喜び、うまいかない葛藤など、多様に心を動かすことが、かかわりが深まるきっかけとなるのではないか。そしてかかわりを深めた先には、もっとかかわりたいという意欲や、自己肯定感の高まりが見られるのではないか…。

逆に、幼児同士のかかわりが深まる姿は、定義づけることは難しいことも見えてきた。幼児同士の個性やかかわり、かかわる状況や経験、文脈が一人一人違うからである。だからこそ、目の前の子どもの姿に照らしながら、語り合い、考え続けることが大切だと考える。たとえ確かな答えは出なくても、そのプロセスにこそ意味があるのだと捉えている。保育者が目の前の子どもを考え続けるプロセスは、きっと保育の質の向上に大きくつながっていると信じている。

## < 5歳クラス Ⅱ期 1・2月 > 「自分たちの暮らしを自分たちでつくる姿」を支える

### これまでの保育の様子

Ⅱ期は、共通の目標に向かって活動し、共に生活する楽しさを味わう時期である。Ⅱ期に入ってから、遊びの時間に、友達と協力して一つの遊びをつくっていきこうとする姿が随所で見られるようになった。例えば、スイーツやさんごっこでは、お店を出すという目的を共有しながら、看板を書く人や商品をつくり出す人などを子どもたち同士で話し合っ決めていく姿が見られた。また、新聞紙を使った人形づくりでは、話し合いながら役割分担を決め、顔をつくる子、足をつくる子などで分かれて作業し、みんなで一つの大きな人形を完成させていくような姿も見られた。

教師は、幼児が自分たちの遊びを自分たちでつくっていく姿に育ちを感じながらも、集団生活の中でもそのような姿が見られることを願っていた。つまり、「自分たちの暮らしを自分たちでつくっていく姿」である。副担任との日々の振り返りの中で、「自分たちの暮らしを自分たちでつくっていく姿」を支える教師は、日々環境を整えることはもちろんであるが、子どもたちの自ら伸びようとする姿を信じ、援助は必要最低限にとどめていきこうと共有していた。教師の指示通り、思い通りになるように遊びや活動をつくるのではなく、幼児自身が話し合いを繰り返し、心を動かしながらつくれるように支えることを思い描いたのである。

本園のカリキュラムには「みんなの時間」がある。遊びの時間での育ちが、この時間にも生きてくるのではないかと考えた。そこで、この時間を核として「自分たちの暮らしを自分たちでつくっていく姿」を捉え、支えていきこうと、援助の方向性を確認した。

1月31日 みんなの時間

クラス全員で、だるまさんがころんだをしている。

P児：「ねえ、みんな、それだめだよ。やめて」

Q児：「え、だってさ、鬼にばれてないじゃん」

P児：「でもさ、そんなのずるいから、だめだよ！」

担任：「Pちゃん、Qくん。何か、みんなにお話したいことある？」

P児：「うん、私、みんなに話したい」

担任：「うん、分かった。うみ組（5歳クラス）さん、

Pちゃんの周りに集まるよ」 うみ組の幼児がP児の周りに集まる。

担任：「みんな、Pちゃんからお話があるみたいですよ」

P児：「あのさ、みんな。Rちゃんがだるまさんがころんだって言った後に、動いちゃだめなんだよ」

S児：「え、どういう意味？」

T児：「ああ、俺分かった。こういうことでしょ？ちょっと来て。Rちゃんが鬼でさ、だるまさんがころんだって言った後に、Pちゃんがこうやって、鬼にばれないように動いて近づくとことでしょ？」

P児：「そうそう、そういうこと。それだとさ、楽しくないから、やめてほしいの」

Q児：「え、だって別によくない？鬼が見てないのが悪いんだから」

P児：「でもさ、それはよくないよ」

R児：「そうだよ、ばれないように動くのは、なしにしよう」

S児：「そうだよ、そうしよう」

Q児：「えー、じゃあいいよ、それで」

担任：「Qくんは、本当にそれでいいの？楽しい？」

Q児：「うーん、僕はさ、鬼にばれないようにした方が絶対楽しいと思う」

T児：「Qくんの気持ちは分かるけどさ、何かずるいことしてるみたいだと思うな、俺は」

Q児：「いや、ずるくないでしょ」

U児：「いいこと考えた！じゃあ、こうしたらどう？あのさ、動くのはなしでやってみて、それからよかつた方で決めるっていうのはどう？」

Q児：「ああ、それならいい」

担任：「Pちゃんはどう？」

P児：「うん。いいよ」

みんなの時間に、だるまさんがころんだをしていると、P児の意見をきっかけとして、鬼に気付かれないように動くことはルールとしてよいかどうかの議論になった。担任は、鬼に気付かれないように動くことは作戦の一つであると捉えていたが、幼児自身がルールをつくるプロセスが「自分たちの暮らしを自分たちでつくる姿」につながるのではないかと考え、遊びの途中ではあるが、「Pちゃんの周りに集まって」と声をかけ、みんなで話し合う機会をつくった。

P児が話し始めると、ほとんどの幼児が真剣なまなざしでP児を見つめながら話を聞いていた。P児は、遊びを楽しくしたいという思いをもち、Q児に対して主張をしていることが読み取れた。また、P児とは対

立する意見をもつQ児からも、この遊びを楽しくしたいという思いが伝わってきた。しかしながら、P児と同様の考えをもっている子が多く、Q児があきらめざるを得ないような雰囲気になっていた。Q児は、そのような雰囲気を感じ取ったのか、半ば自分の主張をあきらめたように「えー、じゃあいいよ、それで」と言った。そこで、担任は「本当にそれでいい？」とQ児に確認をした。Q児が納得できないまま進んでいってほしくないと思ったからである。Q児は、担任の言葉を受けて、自分なりに楽しくしたいという思いをさらに主張した。最後は、U児の考えを全員で実践することになり、P児もQ児も納得しながら遊びを再開した。

副担任との振り返りでは、幼児にとって遊びのルールを考えることが、自分ごとになっていたのでないかということが話題になった。言い合いをしていたP児、Q児はもちろんであるが、周りの幼児でもある。S児の「どういう意味？」という言葉の背景には、S児がP児の言ったことを理解したいという思いがあったのではないかと、また、T児の「こういうことでしょ？」という言葉からも、自分の言葉で言い換えながらP児の主張を理解したいという思いがあったのではないかと話し合った。このように、仲間を受け入れながら、遊びのルールを自分ごととして考える姿は、まさに「自分たちの暮らしを自分たちでつくっていく姿」なのではないかと共有した。

だるまさんがころんだには、いわゆる一般的なルールがある。しかしながら、それにとらわれず、この集団でつくられたルールが大切なのである。教師がトラブルにならないことを考えてルールを敷き、一般的なルールを教えるよりも、一般的なルールとは違っても、自分たちでルールを決めた方が、納得感がある。教師の役割は、ルールをつくっていきこうとする幼児の言葉に耳を傾け、互いの思いをよく理解できるように橋渡しをすることであると考えた。そこで今後も、幼児の思いの橋渡しをすることを意識しながら、みんなの時間での育ちを支えていきこうと、今後の方向性を確認した。

## 2月4日 みんなの時間

クラス全員で、こおり鬼の遊びをしている。

V児：「先生、みんなにお話したいことがあるの」

担任：「うん、分かったよ。うみ組（5歳クラス）さん、集まるよ」

全員がV児の周りに集まる。

V児：「私、鬼にはさみうちをされていやだった」

S児：「私たちだってさ、捕まえないから。それはありにしようよ」

V児：「でもさ、それだと楽しくない」

S児：「じゃあVちゃんはどうしたいの？」

V児：「はさみうちをなしにした方がいいと思う」

S児：「でもさ、鬼だって、頑張っているんだよ」

P児：「気持ちは分かるんだけど、はさみうちはやめた方が楽しいよ」

U児：「私も、はさみうちはなしがいい」

W児：「待って、そんなに言ったらSちゃんがかawaiiそうだよ。あのさ、僕は鬼に捕まらないようにする方法があるんだよ。僕は、こっちに逃げようとして、こっちに逃げると捕まらないんだよ」

Q児：「え、どういうこと？もう一回言って」

W児：「だから、あっちから鬼がきたら、1回こっちに逃げようとするの」

Q児：「よく分からない、Wくんはどうしたいんだろう？」

T児：「うーん、俺もよく分からないなあ」

担任：「うーん、もしかして、本当は左に逃げるんだけど、その前に右ににげるふりをするってこと？」

W児：「うん！そういうこと！」

Q児：「なるほど、分かった、こういうことね」 実際に動いてみる

W児：「そうそう。鬼だって作戦なんだから、逃げる人だって、作戦を考えればいいんだよ」

担任：「Vちゃんは、それでいい？」

V児：「私も、Wくんみたいにしてみようかな」

みんなの時間にこおり鬼をしているとき、はさみうちをされて捕まったことに納得のいかなかったV児は、全員の前で話したいと申し出た。担任は、鬼が、逃げる人を捕まえるためのよい作戦だと思いながら見ていたのだが、みんなが納得できるようなルールをつくってほしいと願い、全員で集まる機会を設定した。

V児、P児、U児がはさみうちはしない方がよいという考えを話した。それに対して、W児は、自分が考えた逃げ方をみんなに話したのだが、聞いている幼児にはあまり伝わっていないように感じられた。そこで担任は、W児の思いがみんなに伝わってほしいと願い、W児の考えを別の言葉で言い換えることにした。すると、逃げる人も作戦を考えればよいというW児の考えが全員に伝わり、V児もその内容に納得をしたのではないかと読み取った。

副担任との振り返りでは、まず子どもたちが自分たちでルールをつくっている姿への感動を共有した。「気持ちは分かるけど…」と自分とは違う考えをもつ子を受け入れようとする姿、「どうしたいの？」と相手の言



葉の裏にある思いを子どもたちなりに読み取ろうとする姿には、担任も副担任も心を動かされた。やはり異なる他者を受け入れようとするのが、「自分たちのくらしを自分たちでつくる姿」につながるのではないかと話し合った。また、普段から担任や副担任が使っている言葉が、子どもたちの言葉になっているのではないかとということも話題になった。担任も副担任も、子どもたちの思いを受け止めたり、言葉の裏にある思いや願いを聞いたりすることを大切にしている。子どもたちは、教師のかかわりをいわゆるモデルのようにしているのではないかと共有した。

2月に入り、この日のような話合いが、遊びの中でも自然発生的に見られるようになっていた。担任は、副担任と相談しながら、2週間後に控えた遊びの発表会「お楽しみ発表会」をつくるプロセスにおいても、「自分たちのくらしを自分たちでつくる姿」が見られるのではないかと考えた。お楽しみ発表会の最後には、全員で歌を歌うことが決まっていた。そこで、お楽しみ発表会で歌う歌は、子どもたちが決めたいと思ったタイミングで、自分たちで決められるように環境を整えた。具体的には、何を歌うかは事前に教師が決めないこと、教師が歌ってほしいと願っていた曲は、普段の保育の中で歌い、幼児の歌のレパートリーを増やしておくことをした。

## 2月8日 帰りの集まり

2月14日のお楽しみ発表会で、何の歌を歌うかを話し合っている。  
「にじのむこう」にと「きみいろ」で意見が分かれて、言い合っている。  
W児：「僕は絶対、『にじのむこうに』がいい」  
P児：「いや、『にじのむこうに』はもう歌ったから、違うのにしよう。」  
W児：「でもさ、上手に歌えるのは『にじのむこうに』だよ。  
ママたちもそっちがいいって言ってた。Pちゃんは、何がいいの？」  
P児：「私は『きみいろ』がいい」  
W児：「僕は『にじのむこうに』がいい」  
教師：「うーん、このままだと決まらないねえ。どうしようか？」  
W児：「ねえ、先生はどっちがいいの？」  
教師：「先生は、『きみいろ』と『にじのむこうに』で今悩んでいるんだ。どっちも素敵だからねえ…」  
W児：「先生も、はっきり決めてよ」  
教師：「分かった、先生も決まったら言うね」  
X児：「あ、僕いいこと思いついた。それなら、両方やめて、違う曲にすれば？」  
S児：「気持ちは分かるけど、今は、どっちかだよ」  
T児：「じゃあさ、多数決にしようよ」  
Q児：「えー、やだ。それだと、決まらなかった方がかわいそうじゃん」  
Y児：「いいこと考えた。混ぜて歌えばいいんじゃない。『♪に一じ色、とりどりの色』って感じ」  
S児：「だめだよ、それだと、どっちの曲か分からなくなっちゃう」  
教師：「おもしろいけどねえ、どうしようか」  
Z児：「私はさ、両方歌えばいいと思う。半分ずつ」  
T児：「ああ、それなら両方歌えるね」  
Q児：「いいじゃん、それ」  
教師：「今Zちゃんが両方歌うって言ったけど、どう？」  
S児：「いいと思う」  
W児：「僕は反対。『にじのむこうに』がいい」  
Z児：「気持ちは分かるよ。Wくんの好きなのも歌えるから、いいんじゃない？」  
W児：「うん、そうだね。両方でもいいよ」

この日、P児は担任のところに行き、お楽しみ発表会で歌う歌を決めたいと話した。担任はその思いを受け、帰りの集まりの際に話し合いの機会を設定した。

話合いでは、『にじのむこうに』と『きみいろ』の2曲が候補に挙がった。担任は、一緒に考えるというスタンスで子どもたちの話し合いに参加していた。X児に、どちらがよいのかを聞かれた時は、どちらかには決めがたく、迷っていることを本音で話すことにした。子どもたちが、多数決で決める、混ぜて歌う、両方半分ずつ歌うなど、次々に案を出していく姿には、担任は心を動かされていた。これこそが「自分たちのくらしを自分たちでつくる姿」だと感じたからである。

この話合いの際に、他県からの参観者がいた。その方々と、この話合いについて語り合う機会をもつことができた。そこでは、子どもとともにくらしをつくっていく教師がどうあるべきかについて話題になった。担任は、この話合いでは一緒に考え、悩んでいくようなスタンスでいたが、一人の仲間としてはっきりと自分の考えを言うこともできた。どちらのスタンスもそれぞれのよさがある。大切なのは、教師も、子どもとともに幸せなくらし（ウェルビーイング）をつくっていくような在り方である。そのような意味で、話合いの際

に、担任がどう考えているかを聞いたW児にとって、担任はくらしをともにつくっていく存在であったのではないかと共有した。担任もしっかりクラスの仲間として受け入れられていると思うと、とてもうれしい気持ちになった。

## 考察

みんなの時間を核に「自分たちのくらしを自分たちでつくる姿」を捉えてきた。まずは、子どもたちが自分ごととして考えていけるように、環境を整えていく大切であると考え。今回のように、みんなで行う遊びを楽しくしたいという思いに寄り添い、話合いをする場をタイミングよく設定したり、教師が決めすぎないようにしたりすることで、子どもたちの「自分たちのくらしを自分たちでつくる姿」につながるのだと実感した。そして、そこにかかわる教師は、子どもたちとくらしを共にしていく一員であると考え。

子どもたちは、何かを教えないとできない存在ではない。本事例で示してきたように、話したいという思いがあると、話型やスキルを教えずとも自分たちで話し合っ解決していくことができるのである。子どもたちが自分で育とうとする存在であることを信じ、環境を整えることが大切であると考え。

このような「自分たちのくらしを自分たちでつくる姿」が、小学校でも見られることを願っている。